有田・小田部

第17集

— 第160・169次調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第339集

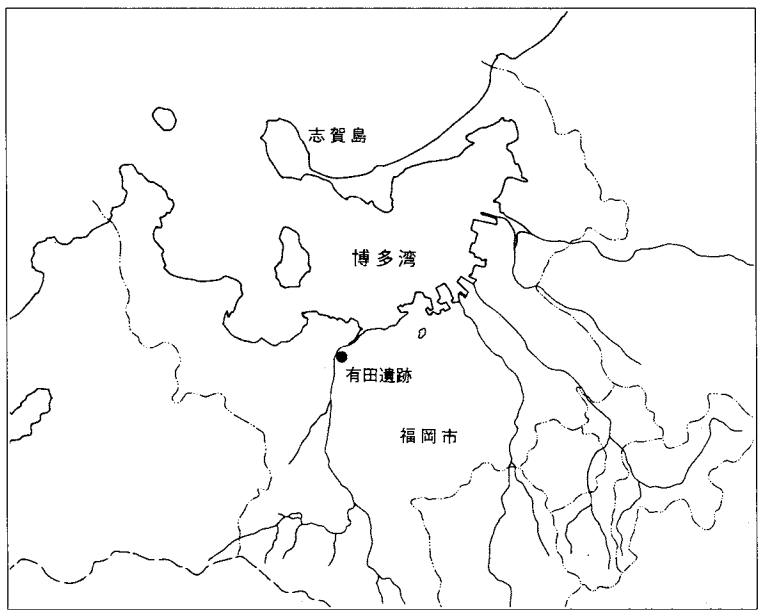
1 9 9 3

福岡市教育委員会

有田・小田部

第17集

―第160・169次調査―



	遺跡略号	遺跡番号
160次	ART-160	9029
169次	ART-169	9147

1993

福岡市教育委員会

序

古来より大陸文化の窓口として繁栄した福岡市は、多くの埋蔵文化財が包蔵されている地域として著名なところです。この福岡市の西部には室見川が作り出した早良平野が拡がっています。しかし、この自然豊かな平野も福岡市の発展とともに急速に市街化が進み、往時の面影は次第に失われつつあります。

この早良平野には、早良王墓として著名な吉武高木遺跡や弥生時代後期の環濠集落跡として国史跡となっている野方遺跡など重要な遺跡が多くあります。平野北部の独立丘陵上にある有田遺跡群もそのひとつです。

有田遺跡群は、旧石器時代から近世まで営々とつづく一大複合遺跡です。昭和41年以来の160次を越す発掘調査では、弥生時代初めの環濠集落、古墳時代の大集落跡、官衙を彷彿させる奈良時代の大建物跡群から戦国時代の小田部城に連なる濠跡など貴重な遺構群が相次いで発見され、広く注目されているところです。

今回報告する第160・169次調査では、古墳時代から古代の集落跡を検出しました。これらは周辺の調査によって集積された多くのデータを補完するもので、有田・小田部丘陵の歴史を繙く貴重な資料となるものです。

本書はこれらの発掘調査成果を収録したものです。本書が市民の皆さんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間にはご指導・ご助言をいただいた諸先生をはじめ、多くの方々のご協力をいただきました。殊に松尾和雄氏や新栄住宅株式会社の各担当の方々には格別のご理解とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成５年１月10日

福岡市教育委員会

教育長　井口　雄哉

…… れ い げ ん ……

1．本書は、1990・92年に福岡市教育委員会が福岡市早良区小田部一丁目と有田一丁目において緊急発掘調査した有田遺跡群の第160次と169次調査の発掘調査報告書である。
2．本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3．遺構は竪穴住居跡をSC、掘立柱建物跡をSB、土壙をSK、溝はSDと呼称を記号化し、その後に各遺構ごとのNoを付した。ただし、第169次調査は調査区を２区分し、担当者も交替して実施したために、Ⅰ区は01からⅡ区は101から遺構Noは通して付して混乱を回避した。
4．本書に掲載した遺構の実測は山崎龍雄、小林義彦、黒田和生、英豪之が行なった。
5．遺物の整理実測は各担当者が行い、製図は小林と藤村佳公恵が行なった。
6．本書に掲載した写真は遺構・遺物ともに山崎と小林が其々撮影した。
7．本報告に係わる遺物・記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。
8．本書の執筆・編集は小林が行なった。

遺跡調査番号：９０２９	遺跡略号：ART－160	分布地図番号：８２－Ａ－１
調査地籍：福岡市早良区小田部一丁目157番地		
工事面積：612㎡	調査対象面積：612㎡	調査実施面積：508㎡
調査期間：1990年８月17日～９月27日		

遺跡調査番号：９１４７	遺跡略号：ART－169	分布地図番号：８２－Ａ－１
調査地籍：福岡市早良区有田一丁目25番地１、２		
工事面積：616㎡	調査対象面積：616㎡	調査実施面積：385㎡
調査期間：1992年２月24日～３月23日、1992年４月18日～５月14日		

本文目次

序
Ⅰ．はじめに …… 1
1．発掘調査にいたるまで …… 1
2．発掘調査の組織 …… 2
3．立地と歴史的環境 …… 5
Ⅱ．第160次調査 …… 7
1．調査の概要 …… 7
2．調査の記録 …… 9
1）．土壙 …… 9
2）．ピットと包含層の遺物 …… 11
3．小結 …… 12
Ⅲ．第169次調査 …… 13
1．調査の概要 …… 13
2．調査の記録 …… 15
1）．竪穴住居跡 …… 15
2）．掘立柱建物跡 …… 16
3）．土壙 …… 18
4）．溝遺構 …… 20
5）．ピットと包含層の遺物 …… 23
3．小結 …… 24

挿図目次

Fig.1．周辺遺跡分布図（1/25,000） …… 3
Fig.2．有田・小田部遺跡周辺地形図（1/7,500） …… 4
Fig.3．有田・小田部遺跡調査地点位置図（1/5,000） …… 折り込み
Fig.4．有田遺跡第160次調査区位置図（1/6,000） …… 7
Fig.5．第160次調査区遺構配置図（1/150） …… 8
Fig.6．SK－01実測図（1/30） …… 9
Fig.7．SK－02実測図（1/60） …… 9
Fig.8．SK－03～05実測図（1/30） …… 10
Fig.9．SK－02・03出土土器実測図（1/4） …… 10
Fig.10．ピット・包含層出土土器・石器実測図（1/4） …… 11
Fig.11．第160次調査区周辺遺構配置図（1/1,000） …… 12
Fig.12．有田遺跡第169次調査区位置図（1/6,000） …… 13

Fig.13. 第169次調査区遺構配置図（1/150） …… 14
Fig.14. SC－04実測図（1/60） …… 15
Fig.15. SC－04出土土器・石器実測図（1/4） …… 15
Fig.16. SC－04出土石器実測図（1/1） …… 16
Fig.17. SB－13～16・104実測図（1/100） …… 17
Fig.18. 掘立柱建物跡出土土器実測図（1/4） …… 18
Fig.19. SK－01・05・101～103実測図（1/40） …… 19
Fig.20. SD－105土層断面図（1/60） …… 20
Fig.21. SD－09出土石器実測図（1/3） …… 21
Fig.22. SD－105・106出土土器実測図（1/4） …… 21
Fig.23. SD－105出土土器実測図（1/4） …… 22
Fig.24. ピット・包含層出土土器実測図（1/4） …… 23
Fig.25. 包含層出土石器実測図（1/3） …… 23
Fig.26. 第169次調査区周辺遺構配置図（1/1,000） …… 24

図版目次

ＰＬ．１．(1)調査区南半部全景（南より）　(2). 調査区北東部全景（北より）
ＰＬ．２．(1)ＳＫ－01（南より）　(2). ＳＫ－02（南より）
ＰＬ．３．(1)ＳＫ－03（南より）　(2). ＳＫ－04（北より）
ＰＬ．４．(1)ＳＫ－05（南より）　(2). 有田第160次調査出土土器・土製品・石器
ＰＬ．５．(1)Ⅰ区全景（東より）　(2). Ⅱ区全景（東より）
ＰＬ．６．(1)ＳＣ－04（北より）　(2). ＳＣ－04・ＳＢ－14～16（東より）
ＰＬ．７．(1)ＳＢ－13（東より）　(2). ＳＫ－103・ＳＢ－104（北より）
ＰＬ．８．(1)ＳＫ－01（南東より）　(2). ＳＫ－101（東より）
ＰＬ．９．ＳＫ－101・102（南より）　(2). ＳＫ－103（東より）
ＰＬ．10. 有田第169次調査出土土器･石器

Ⅰ．はじめに

1．発掘調査にいたるまで

福岡市西部に拡がる早良平野は、近年まで緑豊かな水田が平野一面に拡がっていた。この早良平野の北部にある有田・小田部の台地上には有田、小田部、南庄の三つの集落が点在し、周辺には「小田部大根」を産する畑地が拡がっていた。しかし、急速にすすむ福岡市の人口増加は郊外の市街化を推し進め、有田台地もその例外ではない。殊に今宿バイパスと市営地下鉄の開通以後はその傾向が顕著で、昔日の面影は失われつつある。

有田遺跡群の発掘調査は、1966(昭和41)年の九州大学考古学研究室によって実施された区画整理事業に伴う第1次調査に始まり、これがその後の調査指針となっている。その後有田遺跡群の重要性が認識されるに至って、1975(昭和50)年からは専用住宅等の小規模開発についても国庫補助事業として記録保存に努めている。1992(平成4)年までに調査箇所は169次調査区に亙り、試掘調査までを含めるとその数は200ヶ所を越える。その結果、有田台地における様相が次第に明らかになりつつある。

本書に収録した第160次調査は1990(平成2)年に、第169次調査は1992(平成4)年に民間の開発事業に伴って発掘調査したものである。調査件数は1990(平成2)年度は8件、1991(平成3)年度は3件と減少し、1992(平成4)年の第169次調査を最後として今日に至っている。

第160次調査区は、小田部一丁目に所在し、1989(平成元)年に新栄住宅株式会社より開発計画が提出された。申請地東側の第34・3次調査区では古墳時代の竪穴住居跡等が確認されていることから試掘調査を実施した。その結果、古墳時代の遺物包含層と土壙等の遺構が検出され、発掘調査による記録保存を図った。調査は排土を場内処理したことから南北の2区に分けて実施した。発掘調査は、1990(平成2)年8月17日から開始し、9月27日に終了した。

第169次調査区は、有田一丁目に所在し、周辺は弥生時代から古代の遺構が濃密に分布している。1991(平成3)年4月に地権者松尾和雄氏から開発申請が出され、試掘調査を実施した。その結果、古代の遺構を確認し、協議の末記録保存することとなった。しかし、契約上の問題から早急な調査の着手が望まれ、1992(平成4)年2月24日から3月23日まで北半部(Ⅰ区)の発掘調査を実施した。その後4月18日から南半部(Ⅱ区)の調査を再開した。しかし、家屋解体が一部未了のため調査を一旦中断し、5月14日に総てを終了した。尚、調査は年度を越え、かつ担当者の交替による混乱を避けるため遺構は、Ⅰ区は01からⅡ区は101からのNoを付した。

調査次数	調査番号	調査地地籍	申請面積	調査面積	申請者	調査年月日
第160次調査	9029	早良区小田部一丁目157番地	612㎡	508㎡	新栄住宅株式会社	1990年8月17日～9月27日
第169次調査	9147	早良区有田一丁目25番1、2	616㎡	385㎡	松尾和雄	1992年2月24日～5月14日

2．発掘調査の組織

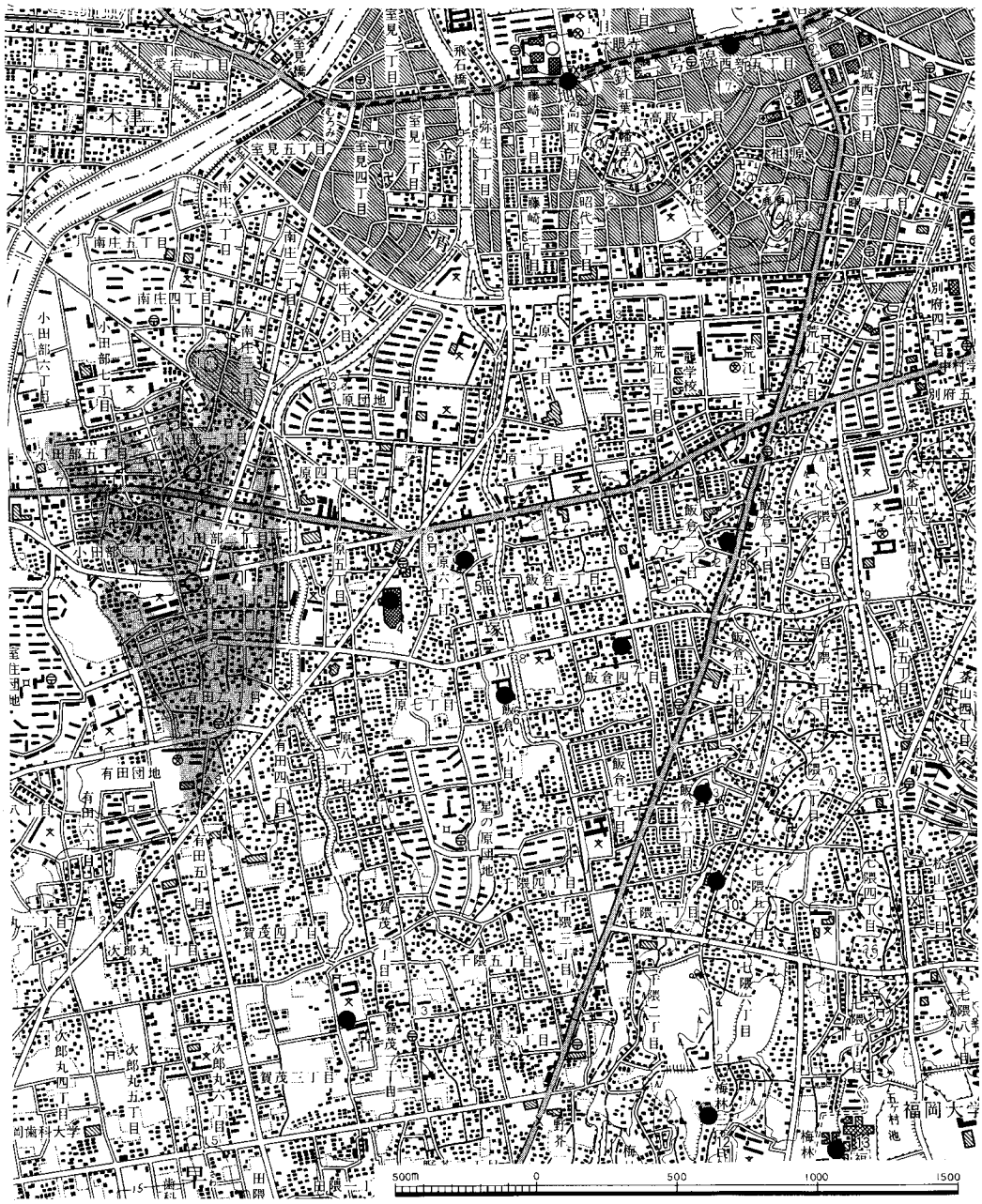
発掘調査には、以下に示す体制を組織して調査にあたった。緊急調査のために充分な体制で調査に臨むことはできなかったが、新栄住宅株式会社、松尾和雄氏をはじめとする関係各位のご協力とご理解のもとに発掘調査及び資料整理は順調に進行しました。ここに記してご協力に謝意を表します。

第160次調査

調　査　委　託　新栄住宅株式会社
調　査　主　体　福岡市教育委員会　教育長　佐藤善郎（前任）　井口雄哉（現任）
調　査　総　括　福岡市教育委員会埋蔵文化財課長　柳田純孝（前任）　折尾学（現任）
庶　務　担　当　飛高憲雄（第１係長）　中山昭則　吉田真由美
調　査　担　当　小林義彦
調査・整理補助　黒田和生　英　豪之
調査・整理作業　尾園　晃（九州大学）　瀬戸啓治　百武義隆　大瀬良清子　金子由利子
久保喜代子　坂田美佐子　柴田タツ子　柴田常人　土斐崎孝子　馬場イツ子
藤長幸子　掘ウメコ　松井フユ子　松本藤子　村嶋里子　門司弘子

第169次調査

調　査　委　託　松尾　和雄
調　査　主　体　福岡市教育委員会　教育長　井口雄哉
調　査　総　括　福岡市教育委員会埋蔵文化財課長　折尾　学
庶　務　担　当　飛高憲雄（第１係長）　中山昭則　吉田真由美
調　査　担　当　山崎龍雄　小林義彦
調査・整理補助　藤村佳公恵
調査・整理作業　西畑盛行　百武義隆　有富溢子　井上紀代子　大瀬良清子　緒方マサヨ
金子由利子　神崎三喜代　清原ユリ子　坂田美佐子　佐藤テル子　柴田勝子
柴田タツ子　柴田常人　土斐崎孝子　土斐崎初栄　西尾タツヨ　馬場イツ子
平井和子　藤崎久子　掘ウメコ　松本藤子　宮原邦江　村嶋里子　門司弘子
吉岡田鶴子



1．有田遺跡群（a.有田160次・b.有田169次）　2．藤崎遺跡　3．西新町遺跡

4．原談儀遺跡　5．原遺跡　6．原深町遺跡

7．飯倉遺跡　8．飯倉Ａ遺跡　9．飯倉原遺跡

10．干隈遺跡　11．鶴町遺跡　12．梅林古墳群

13．七隈古墳群

Fig.1　周辺遺跡分布図（1/25,000）

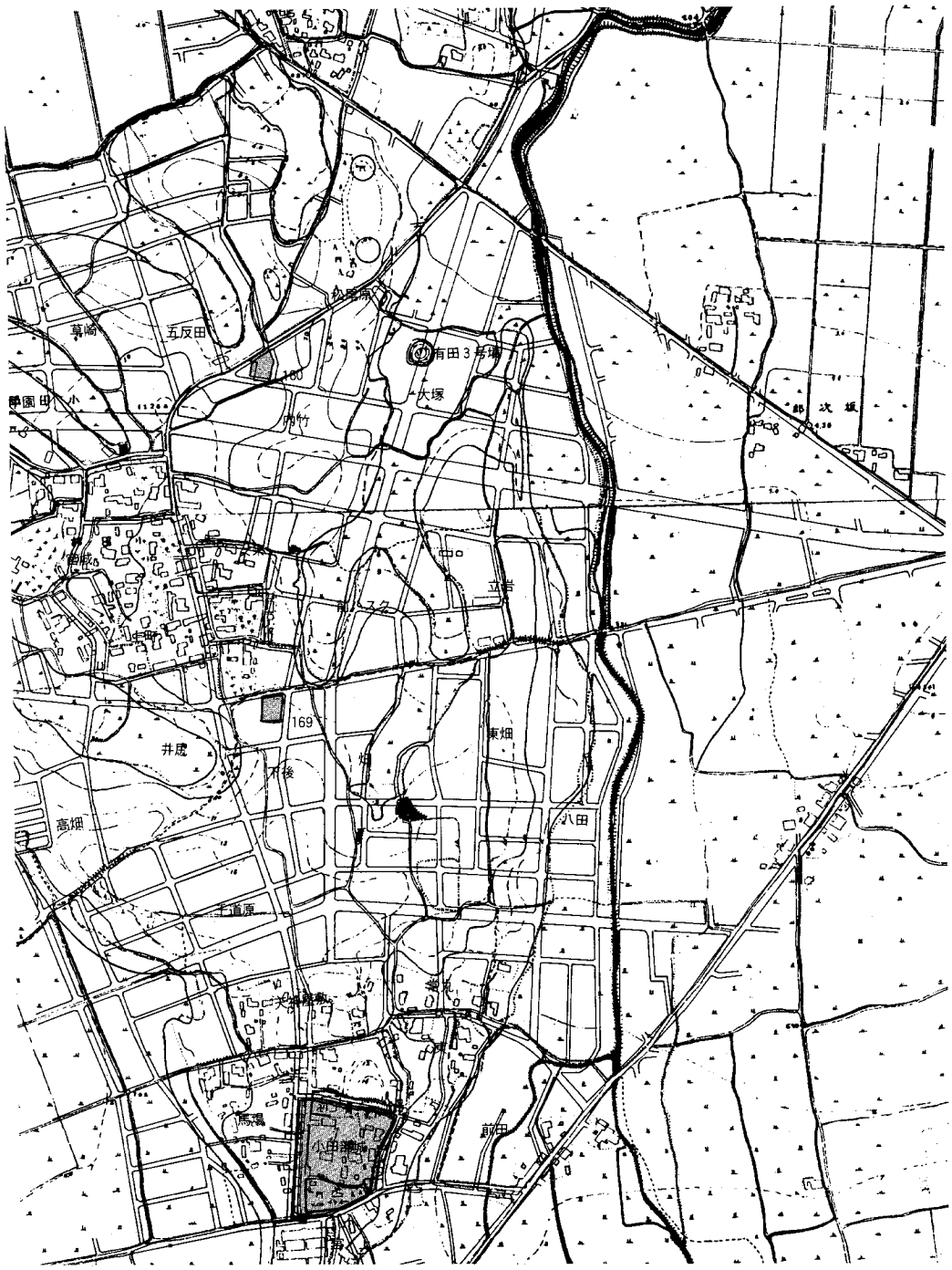


Fig.2　有田·小田部遺跡周辺地形図（1/7,500）

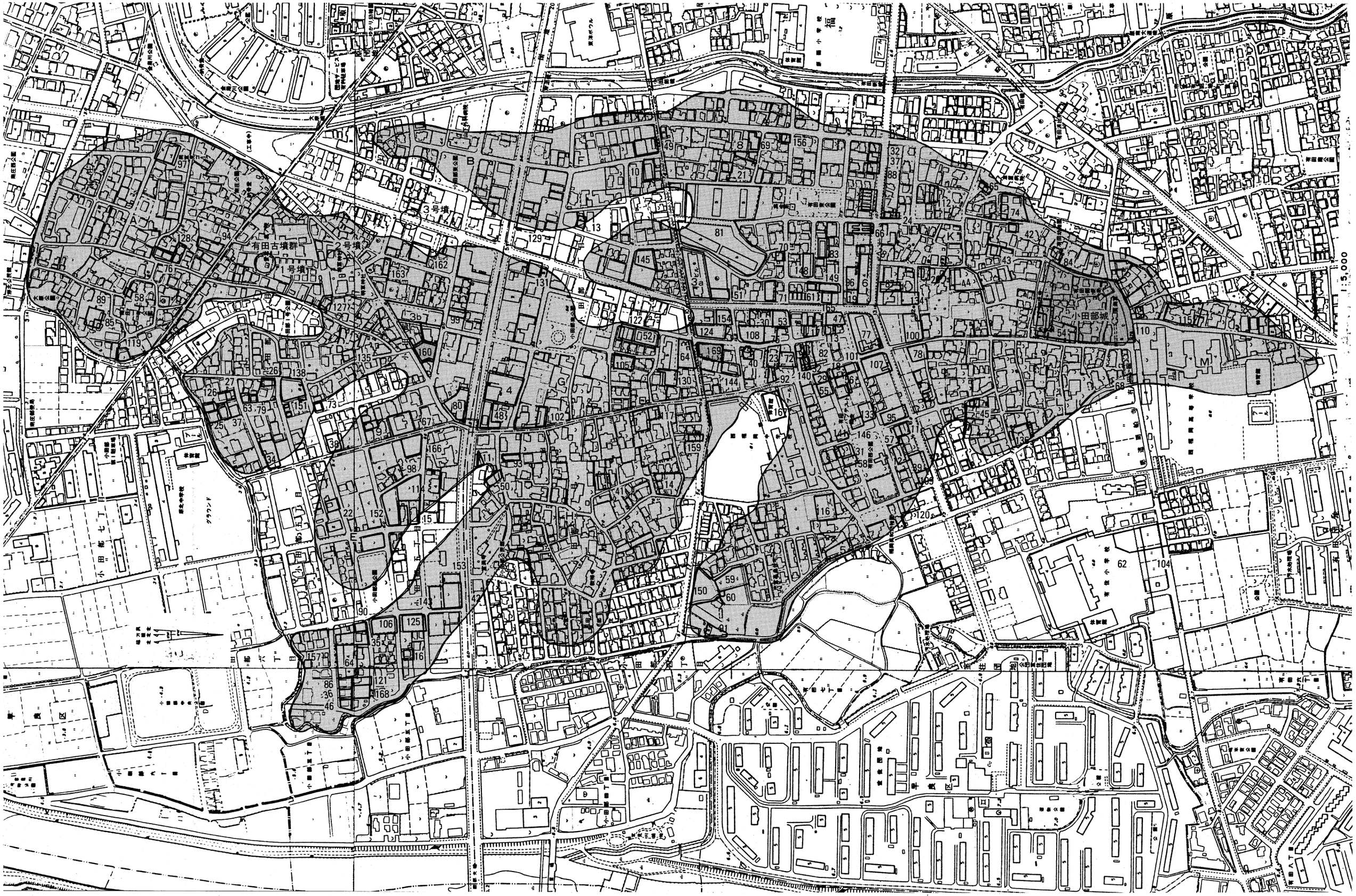


Fig. 3　有田・小田部調査地点位置図（1/5,000）

3．立地と歴史的環境

福岡市の西部に拡がる早良平野は、背振山地を背にして北の博多湾にむかって開口する狭小な平野で、東は油山山塊に福岡平野と、西は飯盛山から長垂山とつづく山塊によって糸島平野と遮られている。この早良平野は、背振山地から流れだした室見川によって造り出された沖積地と博多湾岸の海岸砂丘からなり、平野内には第三紀丘陵と洪積台地が点在している。更に、早良平野の河川上流域は浸食に弱い花崗岩の風化土が広く分布しているところが山地部から丘陵地や低平地の出口にあたる河床勾配遷移点では扇状地が発達している。早良平野では、内野(標高55m)を扇頂とし、飯倉、有田、野方に繋がる扇状地が発達している。

有田遺跡群のある有田台地は、この早良平野の扇状地端の拡がる中央部北寄りの独立中位段丘上に立地し、標高は最高所で約15mを測る。台地の形成は洪積層を基盤とし、八女粘土、鳥栖ローム、新期ロームが層序をなしている。この有田台地は、東西長800m、南北長1,700mで南北に延び、総面積は70万m^2の拡がりをもち、北方へ緩やかに傾斜している。この台地の東側には金屑川、西側には室見川が北流している。そのために台地の縁辺は両河川の浸食を受け、随所に小断崖を形成している。また、台地の北方には、幾筋もの浅い開析谷が台地内の奥深くに貫入して幾筋もの小支丘を形成し、いわゆる八ツ手状の形状を示している。

この有田台地上には、有田、小田部、南庄の集落があるが、古代では早良六郷のひとつである田部郷の中に含まれている。この田部郷は明治22年の町村制施行によって原村の中に組み入れられ、更に昭和4年の合併によって福岡市に編入され、今日に至っている。

早良平野における考古学的調査は、比較的新しく明治時代以降の西新、藤崎、五島山のように海岸部を中心とした遺跡が報告されているが、1966(昭和41)年の有田遺跡群の第1次調査に至って本格的に発掘調査が開始される。その後、宅地開発、道路建設、圃場整備事業等の進行により平野外縁の丘陵地帯、沖積地や博多湾に面した砂丘上で旧石器時代から江戸時代にいたる遺跡が次々に調査されている。早良王墓として著名な吉武遺跡群の弥生墳墓や東入部遺跡群の甕棺墓群はこれまでの考古学的見識を覆しつつある発見例である。

有田遺跡群は、有田台地上に立地する旧石器時代から近世までの遺構が重層的に重複する一大複合遺跡である。古くは江戸時代の文献に、小田部村に筑紫殿塚、松浦殿塚(有田1号墳、3号墳)があると記載されている。1949(昭和24)年には西福岡高校内から発見された金海式の甕棺墓から銅戈が出土している。これが有田遺跡群での最初の調査である。その後、1966(昭和41)年に九州大学考古学研究室によって実施された区画整理事業に伴う第1次調査以来、1992(平成4)年末までに169次に亘る発掘調査が実施されている。

有田台地内における歴史を概観すると、旧石器時代は第6・77・107・131・152次調査区等で遺物が検出されている。第6次調査区ではナイフ型石器、ポイントが、第131次調査区では

台形石器が出土している。

縄文時代では、第５・116次調査区で馬蹄形状に巡る中期から後期にかけての貯蔵穴群が検出されている。

弥生時代になるとその分布密度は濃厚になる。縄文時代晩期末から弥生時代初頭のＶ字溝が、第２・45・54・77次調査区等で確認されている。これらの溝は一体として有田地区の台地高所を楕円形に巡る環濠となり、規模は長径300ｍ、短径200ｍにもなる。また、その出入口となる陸橋部は第133次調査区の南側で確認されている。前期後半から中期になると集落域は台地全域に拡大し、墳墓地も縁辺域の５ケ所に営まれる。西福岡高校内で検出された銅戈を副葬する甕棺墓はその代表例といえよう。第３・82・108次調査区では青銅利器の溶笵も出土しており、青銅器鋳造の可能性を考えさせる。しかし、後期にはその様相は一変し、集落は縮小化する傾向を示す。

次の古墳時代になると、竪穴住居跡や掘立柱建物跡等からなる集落が全期間に亘って広く台地上に分布する。墳墓としては、小田部地区に筑紫殿塚（有田１号墳）、松浦殿塚（有田３号墳）等の大型の円墳が築かれ、在地勢力の集約化による有力な首長層が出現しつつあることを予想させる。

律令時代になるとこの一帯は、和名抄による早良郡田部郷に比定されている。有田地区には大型の柱穴をもつ掘立柱建物跡群が集中して検出される。第56・57・77・78・82・101・107次調査区では大型の倉庫や居宅的建物跡群が検出されている。有田遺跡群の西方約２㎞には古代官道に付設された「額田駅」が比定されている。これを勘案すれば、これらの建物群が郡衙等の官衙的性格の建物群とも考えられる。円面硯や金帯具、越州窯系や長沙窯系陶磁器の出土もそのことを容易に裏付けている。また、台地上には３本柱の棚で囲まれた倉庫群が６ケ所で確認されており、那の津官家との関連性が論議される。

中世には、在地勢力の伸長と相俟って名田や名主屋敷が形成される。中園屋敷、淀姫屋敷としての字名を今に残し、その存在を窺わせる。中世後半代には大内氏の筑前進出とともに早良郡代大村興景の知行地が小田部の下中園にくだされ、その地の調査では方形に巡る溝が検出されている。また、戦国時代末期の16世紀後半代になると大友氏の被官である小田部氏の里城（小田辺城）が有田の地に築かれる。その城に伴う幅５～10ｍの空濠が「Ｌ字型」また「コ字形」の郭を形成し、その範囲は200ｍ四方にも及ぶ。大内氏関係の遺物や明、李朝の陶磁器が出土しており、16世紀前半代～中頃の築城と考えることができよう。中世の遺物として中国陶磁器や朝鮮陶磁器が多く出土することは、博多が貿易港として繁栄したことや大内氏の朝鮮貿易とも深く関わりをもつものであろう。

Ⅱ．第160次調査

1．調査の概要

有田遺跡群の第160次調査区は、早良区小田部一丁目157番地に所在し、有田台地の北西部に位置する。地形的には、台地の中央部から八ツ手状に派生する支丘の基部にあたり、すぐ北西側には細長い開析谷が貫入している。そのために調査区は西にむかって緩傾斜している。

本調査区の周辺では、第34・67・80・99次調査等が実施されている。その結果、弥生時代の貯蔵穴や竪穴住居跡をはじめ、古墳時代～古代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡等が多数検出され、周辺地域には弥生時代～古代・中世にいたる集落遺構や墳墓域が拡がっていることが確認されている。

第160次調査区では、表土下20～50cmで鳥栖ローム層に達し、この面に遺構が掘り込まれている。また、この上層には黒褐色土の遺物包含層が5～35cmの厚さで西にむかって肥厚しながら堆積していた。この遺物包含層には古墳時代の遺物を含んでいるが、いずれも小片で量的にも少ない。本調査区で検出した遺構は、土壙5基とピットである。ピットはその数500を越え、圧倒的な量を占めるが掘立柱建物跡としてまとまりを示すものはなかった。一方、土壙は土壙墓と考えられるものや鉄滓を包蔵する焼土壙等があり、その機能の一端を窺い得るものが検出されているが散漫的な分布状況を示している。この傾向は東接する第34次調査区でも同様のあり方を示し、緩斜面上に占地する所以に起因するのかもしれない。

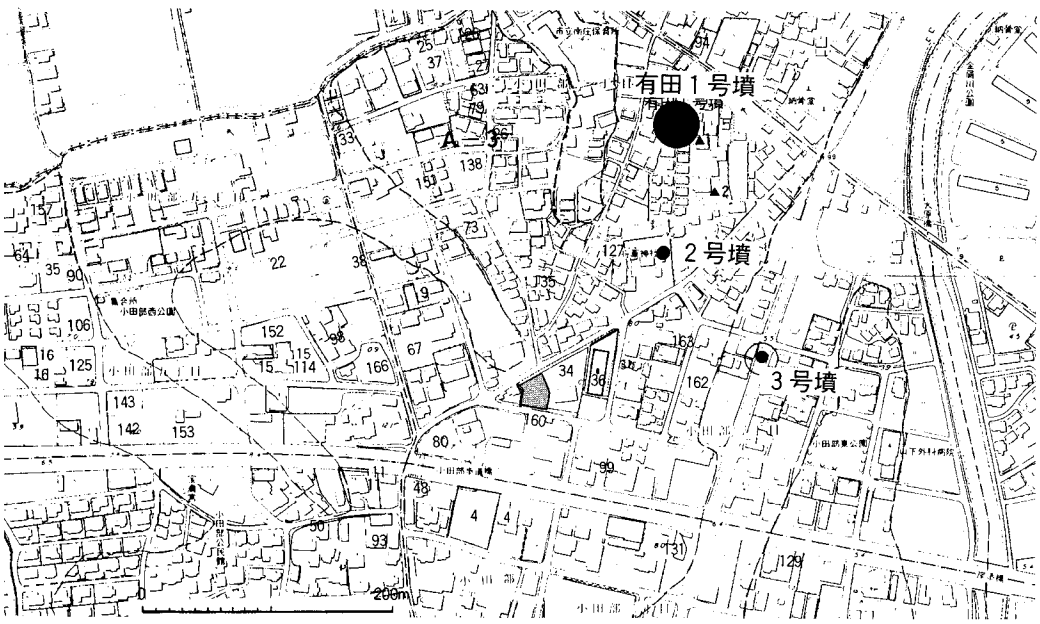


Fig.4　有田遺跡第160次調査区位置図（1/6,000）

Fig.5　第160次調査区遺構配置図（1/150）

2．調査の記録

1）．土壙

第160次調査では、すべてで５基の土壙を検出した。これらの土壙は調査区の北半部に散漫的に分布し、特定のまとまりは示さない。形状的には円形、楕円形、長方形プランがあり、少量ながらその出土遺物から中世期に比定できる。その機能については即断しがたいが、SK－01は墳墓の可能性が考えられる。また、近接するSK－04・05は覆土中に鉄滓や焼土塊が含まれることから自ずとその機能を窺い得よう。

SK－01（Fig.6、PL.2）

調査区の検出した土壙で、西側小口部は近世溝によって切られている。平面形は、長軸220cm、短軸60cmの長方形プランを呈し、主軸方位をＮ－80.5°－Ｗにとる。壁面はやや急峻に立ち上がり、深さは10～15cmを測る。底面は平坦で、断面形は箱型をなす。覆土は黒褐色土～暗褐色土が浅く凹レンズ状に堆積していた。

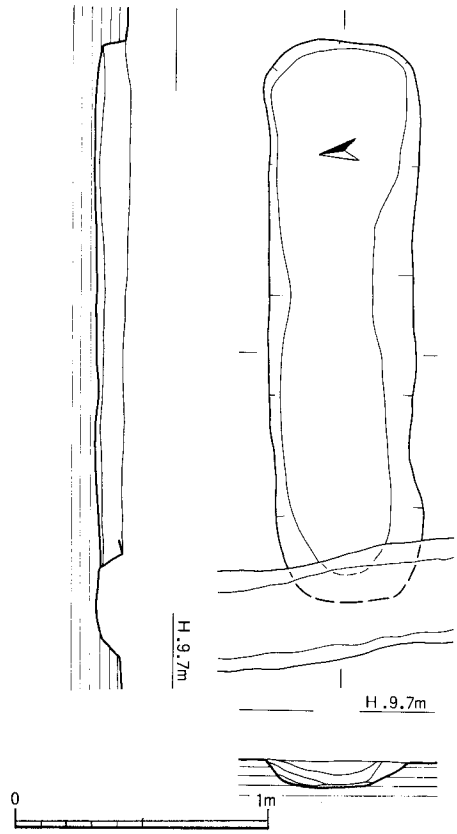


Fig.6　SK－01実測図（1/30）

SK－02

（Fig.7、PL.2）

調査区の北東部で検出した大型の土壙で、西側の一部は近世溝によって切られている。平面形は長軸4.15ｍ、短軸1.4～2.1ｍの楕円形プランを呈し、Ｎ－5°－Ｗに主軸方位をとる。土壙は、北半部を

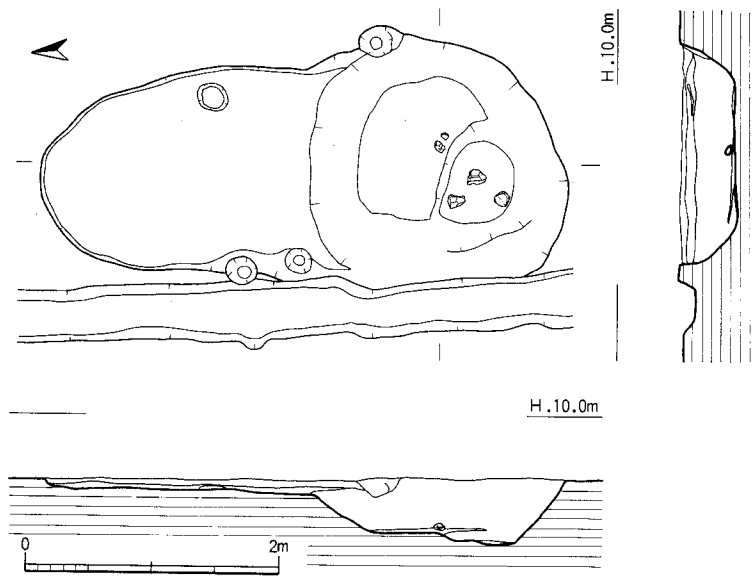


Fig.7　SK－02実測図（1/60）

一旦浅く穿ったのち南側を摺鉢状に深く掘り込んでいる。この南側壙は壙底でさらにフラット面を作り、断面形は梯状をなす。深さは北側で10cm、南側の最深部で約50cmを測り、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土は黒～黒褐色土を主体とし、壙内からは、土師器片の外に鉄滓と石鍋片が出土している。

出土遺物（Fig.9、PL.10）

1は土師器小皿で、口径8.7cm、底径7.2cm、器高1.3cmを測る。口縁部は短く外反し、底部は凹レンズ状をなす。調整は口縁部がヨコナデ、底部はナデて仕上げている。胎土は精緻で、黄橙色を呈する。

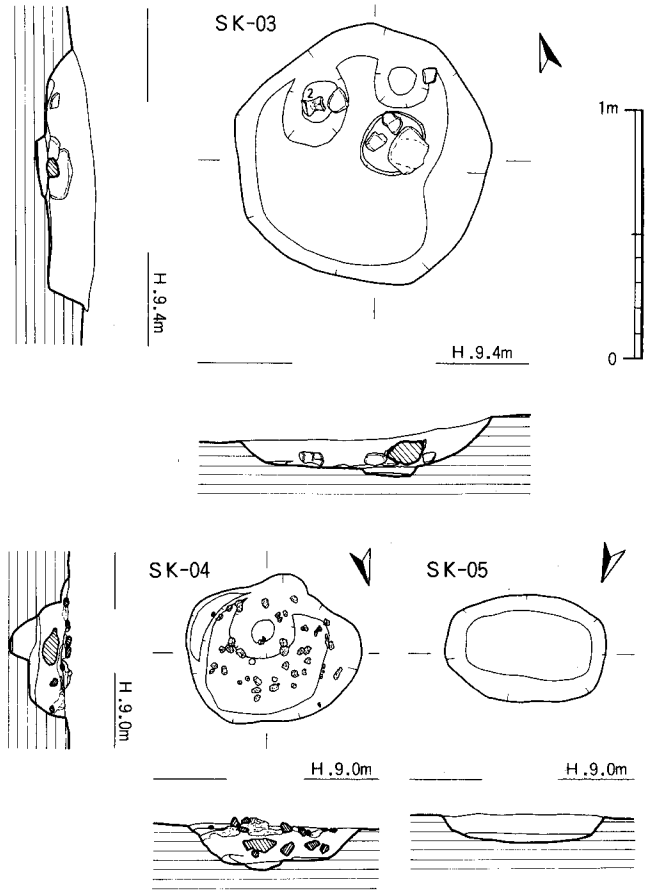


Fig.8　SK－03～05実測図（1/30）

SK－03（Fig.8、PL.3）

調査区の北西部で検出した土壙で、SK－02の西方約10mの距離に位置する。平面形は径約1mの円形プランを呈し、深さは20cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。底面は浅い凹レンズ状をなし、北側に偏して径約25cm程の小ピットが3ケ所にある。覆土は、黒褐色土で須恵器高杯の外に土師器小片が出土した。

出土遺物（Fig.9、PL.10）

2は須恵器高坏の脚部で、裾部はラッパ状に開く。脚部上位には2条の浅い横凹線が巡り、その直下には透かし様の刻みが縦方向に3本はいる。調整は坏部がナデ、脚部は内外面ともヨコナデ。胎土は精緻で、濃灰色を呈する。

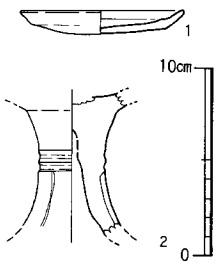


Fig.9　SK－02・03
出土土器実測図(1/4)

SK－04（Fig.8、PL.3）

調査区の北西部にある小型の土壙で、SK－05のすぐ北に位置する。平面形は長軸70cm、短軸55cmの楕円形プランを呈し、主軸方位をN－75.5°－Wにとる。深さ

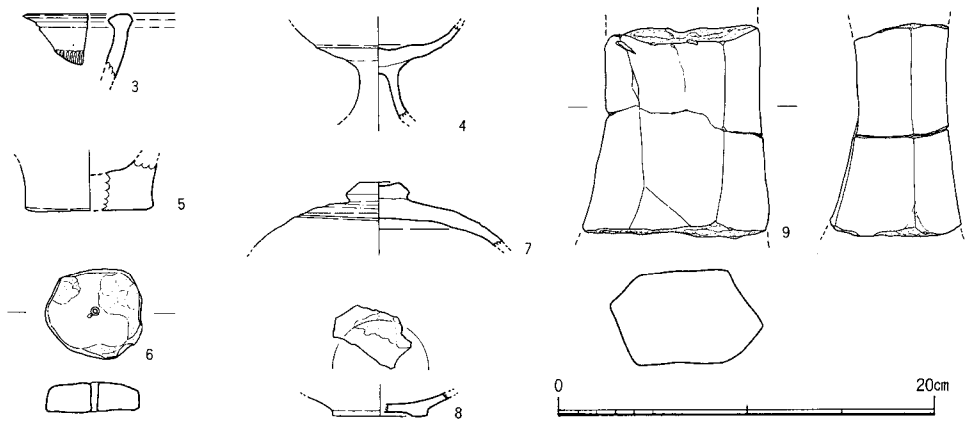


Fig.10　ピット・包含層出土土器・石器実測図（1/4）

15～20cmを測る壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。底面は浅い凹レンズ状をなし、南壁側には径25cmの小ピットがある。壙内の上層には３～10cm大のスラッグ片が炭片や焼土粒に混じって充満していた。

SK－05（Fig.8、PL.4）

調査区の北西部にある土壙で、SK－04のすぐ南にある。平面形は長軸63cm、短軸43cmの楕円形プランを呈し、N－71.5°－Eに主軸方位をとる。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は約10cmを測る。底面は浅い凹レンズ状をなし、断面形は逆台形をなす。覆土上層は焼土塊を含む赤褐色土からなり、焼土壙と考えられる。

2）．ピットと包含層の遺物

第160次調査区では、５基の土壙外に大小約500個のピットを検出した。これらのピットの中には明瞭な柱痕跡を残しているものもあるが、掘立柱建物跡としてまとまりを示すものはなく、遺物の出土も少ない。また、西にむかって緩傾斜する台地上には古墳時代の須恵器・土師器片を主とする黒褐色土の遺物包含層が25～35cmの厚さで堆積していたが、包蔵する遺物量は比較的少ない。

出土遺物（Fig.10、PL.4）

３～６はピット出土のものである。３は鉄釉の摺鉢でSP－05より出土。口縁部は内方に摘み出し、内面には細かい摺目が入る。胎土は肌理の細かい灰褐色土で、茶色釉を薄くかけている。４はSP－11出土の須恵器高坏である。体部下半には摘み出した凸帯様の浅い稜がつき、脚部は短くラッパ状に開く。調整は坏部内底面がナデのほかはヨコナデで仕上げている。胎土は良質で、焼成は堅緻。色調は灰黒色を呈する。５はSP－39より出土した弥生土器の甕底部で、底径は6.8cmを測る。胎土には石英砂を多く含み、橙色を呈する。６はSP－25出土の紡錘車で、破砕した土器片を面取り加工したものである。直径は4.8～5.1cm、厚さは1.6cmを測る。

7～9は包含層より出土した。7は偏平な摘みのつく須恵器坏蓋である。体部は内弯ぎみに立ち上がり、中位に横凹線が1条巡る。調整は体部がヨコナデ、内底面がナデ、外底面はヘラケズリ。胎土は精緻で、濃灰色を呈する。8は唐津焼の皿で底径は5.0cmを測る。胎土は褐味の灰色土で、見込には大きな砂目が残る。9は砂岩質の砥石で、両端部を欠く。砥面は6面あり、磨き込みによる面反りが著しい。現長は11.3cmを測り、砥面には二次焼成による赤変がある。

3．小　　結

有田遺跡群の第160次調査では、5基の土壙を検出した外はピットが圧倒的な数を占めている。これらピットの中には、しっかりした掘方の中に明確な柱痕跡を確認したものも少なくないが、ひとつの掘立柱建物跡としてまとめうるものは1棟もなかった。一方、検出した土壙のうち、SK－01はその形状からして土壙墓と考えられるものである。また、小型の土壙SK－04・05は焼土壙である。このうちSK－04は壙内から比較的多くの鉄滓片が出土している。覆土中には焼土粒や炭片も混入していることから鍛冶炉の可能性をも示そう。本調査区北西の谷貫入部にあたる第33次調査区では製鉄炉が検出されている。遺物がなく時期的には明言しえないが古代末から中世に比定しえようか。このように本調査区で検出した遺構はピットを除いて非常に少なく、きわめて希薄な分布状況を示す。このような在り方は古墳時代の竪穴住居跡1軒と4棟の掘立柱建物跡を検出した東隣の第34次調査区でも同様の傾向が窺われ、貫入する開析谷に面した周辺の第73・135・9次調査区等とも同じである。このことは貫入する痩せた開析谷に面する緩傾斜面上の占地に起因するものとも考えられよう。

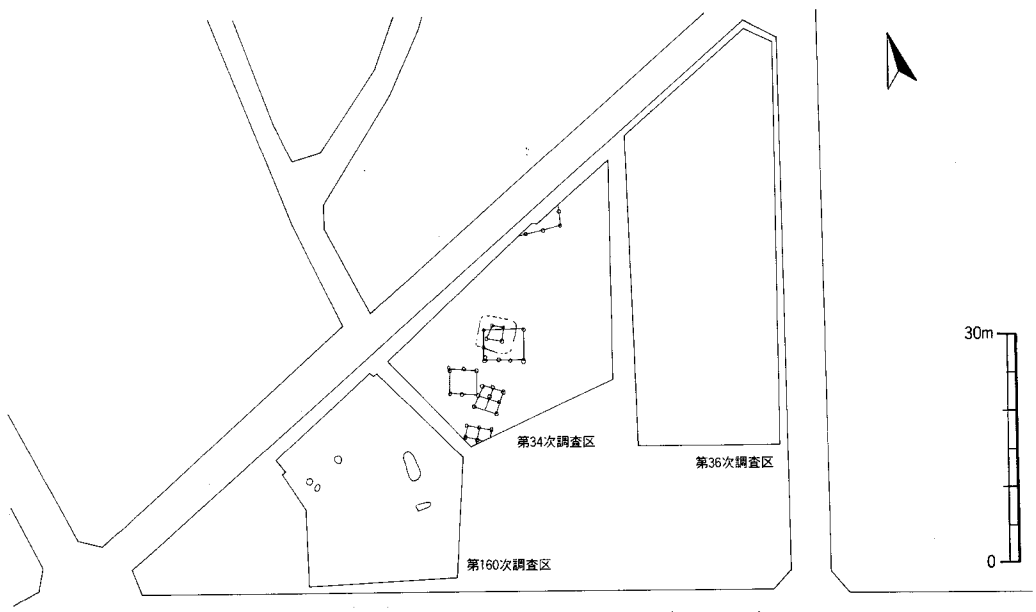


Fig.11　第160次調査区周辺遺構配置図（1/1,000）

Ⅲ．第169次調査

１．調査の概要

有田遺跡群の第169次調査区は早良区有田一丁目25番１、２に所在し、有田・小田部台地のほぼ中央部に位置する。地形的には、丘陵が最も狭まった鞍部上に立地する。

本調査区周辺は東から第124・154・40・144・164次調査区等があり、有田遺跡群中でも最も発掘調査の実施されている。これらの調査では弥生時代～古墳時代の竪穴住居跡や古墳時代～中世の掘立柱建物跡等の多くの遺構が検出されており、弥生時代から中世までの遺構が濃密に分布している地域である。

第169次調査区は、表土下15～65cmで遺構の掘り込まれた鳥栖ロームに達し、その上層には黒褐色土の遺物包含層が20～45cmの厚さで堆積している。しかし、この遺物包含層は調査区の中央部を東西流する大溝（SD－105）を境として一段低くなる北側に堆積し、溝南側の台地上では検出されなかった。この遺物包含層中には古墳時代～古代の須恵器や土師器片を含んでいるが、遺物量は比較的少ない。本調査区で検出した遺構は竪穴住居跡１軒、掘立柱建物跡５棟、土壙５基、溝遺構４条とピットがある。これらは調査区全域にわたって分布し、特定のまとまりは示さない。調査区の中央部では東西流する濠状の大溝（SD－105）が検出された。この大溝は、東接する第124・３次調査区内で検出された東西方向の大溝に連なるものである。また、掘立柱建物跡は周辺調査区で検出されたものと一群をなして展開するものである。

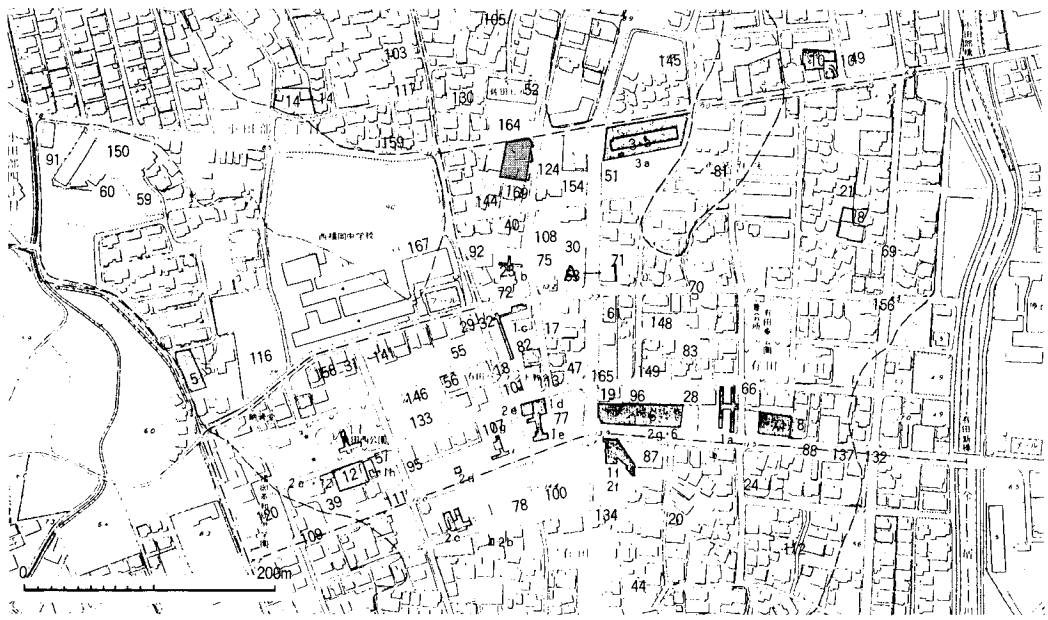


Fig.12　有田遺跡第169次調査区位置図（1/6,000）

Fig.13　第169次調査区遺構配置図（1/150）

2．調査の記録

1）．竪穴式住居跡

本調査区で検出した竪穴住居跡は１棟である。しかしながら、北接する第64次調査区や東接する第124・154次調査区では弥生～古墳時代の竪穴住居跡が多数検出されており、当地周辺には該期の住居跡群が展開しているものと思われる。

SC－04（Fig.14、PL.6）

調査区北側で検出した主軸を東西方向に取る不整隅丸長方形の住居跡。包含層下面で検出した。規模は長さ4.0m、幅3.15mを測り、残存壁高は最大で16cmである。壁の勾配は緩やかで、床面はかなりの凹凸がある。西壁中央の南寄りに焼土・炭化物・灰白色粘土の集中する所があり、竈があったと思われる。主柱は４本である。規模は長径30～60cmを測るが、深さは10～15cmで、明確な掘り込みがなく、だらっとしている。主柱間距離は東西が1.4～1.5m、南北1.2～1.3mを測る。住居跡の埋土は、黒褐色粘土を主体とするが、下層は黄褐色地山ロームブロックを多く含む。遺物は古墳時代の土師器・須恵器の小片が出土している。図示していないが、Ⅲb期の須恵器の坏蓋・身がある。

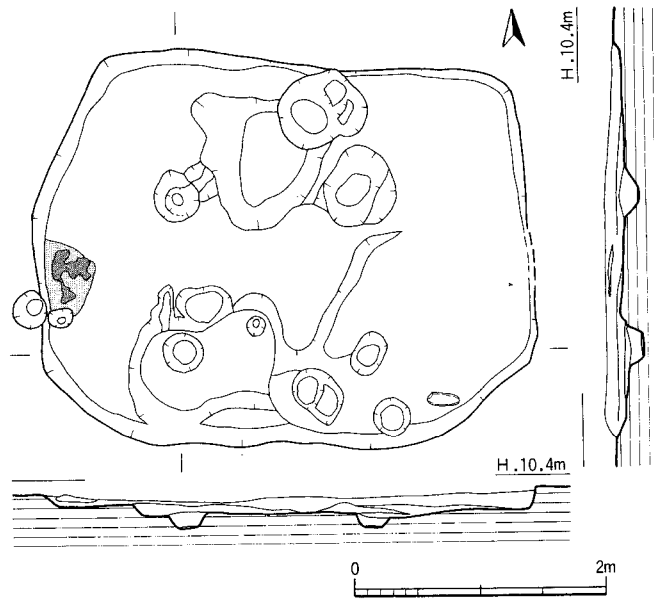


Fig.14　SC－04実測図（1/60）

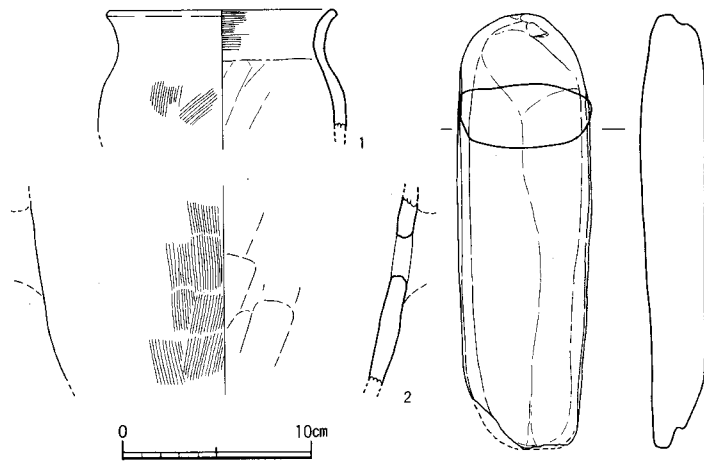


Fig.15　SC－04出土土器・石器実測図（1/4）

出土遺物（Fig.15・16、PL.10）

1は土師器の口縁部小片。復原口径12.2cmを測る。口縁外面は横ハケ、胴部は粗い縦又は斜めハケ。胴内面はヘラケズリ。外面に少量煤が付く。色調は明褐色。胎土は石英・長石粒を少量含む。2は甑の胴部片。SD－09北側の不明土壙出土の破片と接合。差し込み式の把手が付くもので、外面は粗い縦ハケ。内面ヘラケズリ。色調は灰褐色、胎土は粗砂粒を多く含む。3は磨石で南壁沿いの床面出土。扁平なコッペパン状の形態で、黒灰色で石質は粘板岩。長さは23.1cm、最大幅7.1cm、最大厚3.4cmを測る。上面と下面、両側面に使用による擦り痕が残る。4は黒曜石製の打製石鏃・凹基式で基端を一部欠失する。鏃身2.3cmを測る。

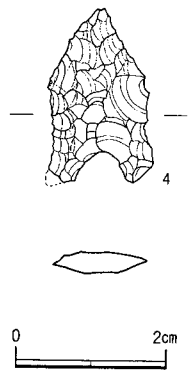


Fig.16 SC—04
出土石器実測図（1/1）

2）．掘立柱建物跡

第169次調査では、調査区全域にわたって5棟の掘立柱建物跡を検出したが、調査域が狭小なために特定の分布域を構成するかは即断できない。しかしながら、隣接する第64・124・154次調査区でも検出されており、周辺全域にわたって広く分布しているものである。

SB—13（Fig.17、PL.7）

調査区西壁にかかる主軸方位をN－57°－Eに取る3×5間以上の東西方向の側柱建物。梁間全長4.55m、桁行全長7.0mを測る。各柱の間隔は全体的に狭い。柱穴掘方は円形で、規模は長径30～70cm位、深さは北側柱列が比較的深い。柱径は痕跡等から20～25cm位か。埋土は黒色から黒褐色土を主体とする。遺物は各柱穴から土師器の細片や須恵器片が少量ずつ出土している。

出土遺物（Fig.18、PL.10）

5はP.6の掘方内出土。須恵器のⅢb期の坏身1/3片。復原口径11.0cm。受部径13.2cm、器高4.1cmを測る。立ち上がりは内傾し、底部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ。内底は不整方向ナデ。色調は灰色、胎土・焼成は良好。

SB—14（Fig.17、PL.6）

調査区の北側SC－04東側で検出した1×1間の建物。東西柱間は2.16～2.25m、南北柱間1.95～2.0mを測る。掘方平面はほぼ円形で、規模は長径60～75cm、深さ55～65cmを測り、底面に柱痕跡を残すものもある。柱径は痕跡から約15cmと考える。埋土は黒色土が主体。遺物は土師器の細片がわずかに出土した。

SB—15（Fig.17、PL.6）

調査区中央の大溝に切られた主軸方位をN－30°30′－Eに取る2×2間の建物。南北方向2.88～3.05m、東西方向3.07～3.22mを測り、ややいびつ。柱穴掘方は円形又は楕円形、規模

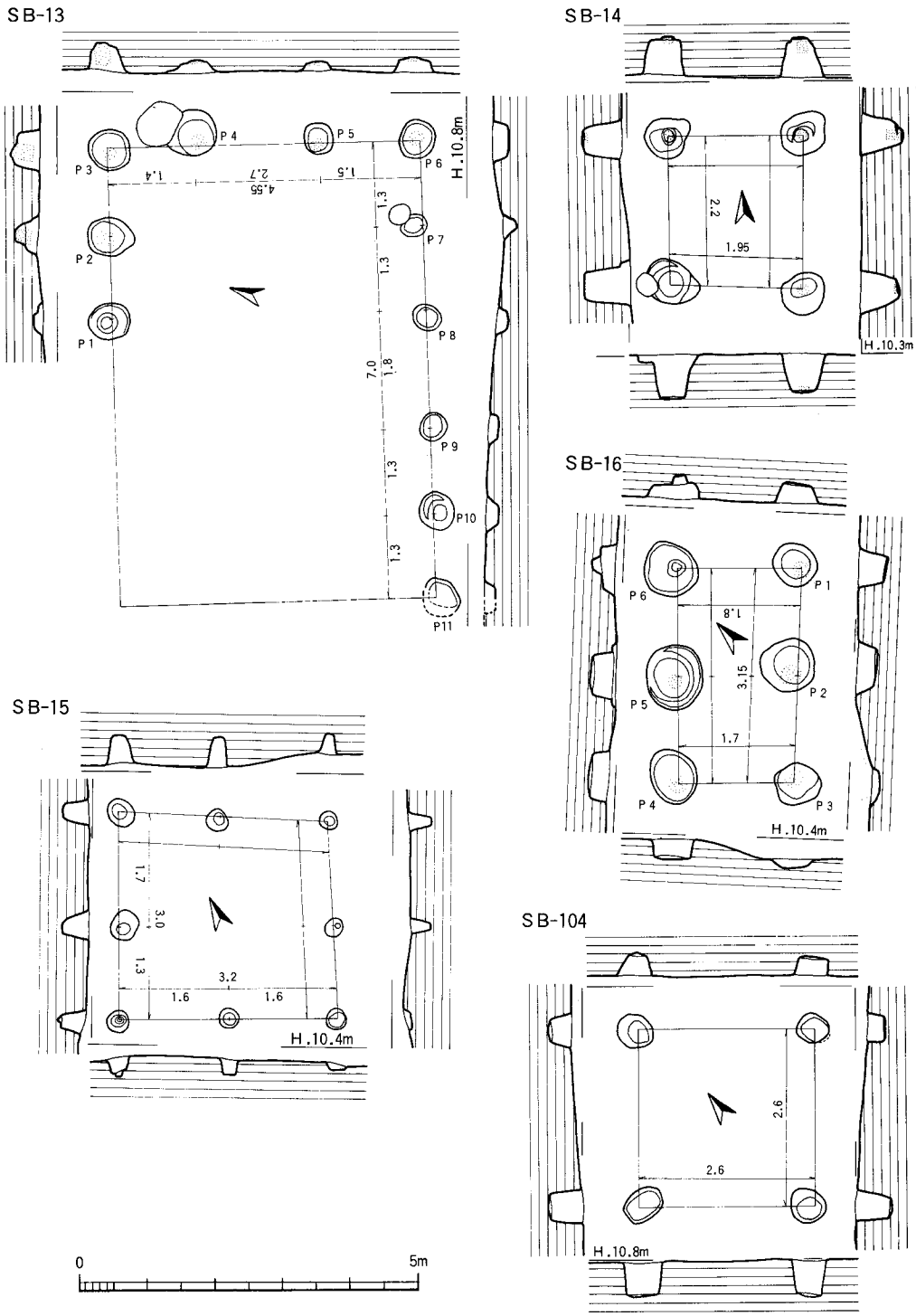


Fig.17　SB−13〜16･104実測図（1/100）

は20～45cm、深さ13～45cmを測り、南東隅柱がやや浅い。埋土は黒色又は黒灰色土である。遺物は１つの柱穴から土師器の細片が１点出土した。

SB－16（Fig.17、PL.6）

調査区北東側で検出した主軸方位をＮ－47°37′－Ｅに取る１×２間の建物。桁行全長3.15ｍ、梁間全長1.7～1.8ｍを測る。柱穴掘方は円形又は楕円形で、規模は長径で60～93cm、深さは25～35cmを測る。底面には柱痕跡が残るものもある。柱径は痕跡から15～25cm位か。埋土は黒色又は黒褐色、黒灰色粘土を主体とする。遺物は各柱穴から弥生土器、土師器、須恵器の細片が少量ずつ出土している。

出土遺物（Fig.18、PL.10）

６はＰ－２出土の須恵器の高坏片。脚端径7.8cmを測る。内外面回転横ナデ。色調は灰色、胎土・焼成は良好。７は白磁の無頸壺の口縁部１／10片。近世のもので混入品である。

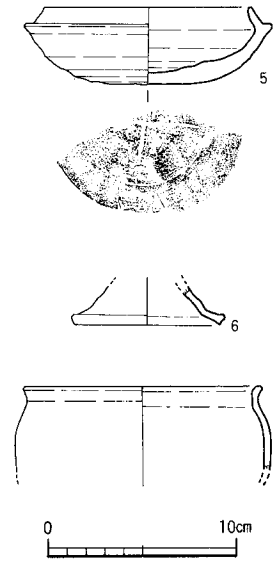


Fig.18
掘立柱建物跡出土土器実測図
(1/4)

SB－104（Fig.17、PL.7）

本址は、調査区の南東端で検出した１×１間の建物跡で、SK－103の東約２ｍの距離にある。梁間、桁行ともに全長2.6ｍの等間である。柱穴は径50～60cmの円～楕円形プランを呈し、深さは30～50cmを測る。

３）．土　　壙

土壙は、すべてで５基を検出した。これらの土壙は平面的には楕円形～長方形プランを呈し、調査区の全域で散漫に分布する。しかし、その機能はSK－103が墓壙の可能性を示す外はいずれも判然としない。

SK－01（Fig.19、PL.8）

調査区北側境界地で検出した現代攪乱に切られる土壙又は住居跡の一部。平面形は長方形を呈すか。確認長2.5ｍ以上、幅1.2ｍ以上、深さ15cmを測る。北側にテラスを持ち、床面は南側が一段下がる。床面は粘土を貼り付けており、その下からピット状の浅い掘り込みを５個確認した。東側に直径70cm、深さ65cmを測る柱穴がある。埋土は黒褐色粘質土が主体で、地山ロームブロックを混入する。遺物は少量あるが、古墳時代の土師器が大半で、須恵器２点を含む。

SK－05（Fig.19）

SC－04をきる略円形の浅い土壙。直径1.65～1.5ｍ、深さは８cmと浅い。埋土は黒灰色土。遺物は土師器の細片や焼土塊、不明鉄製品の小片を含む。

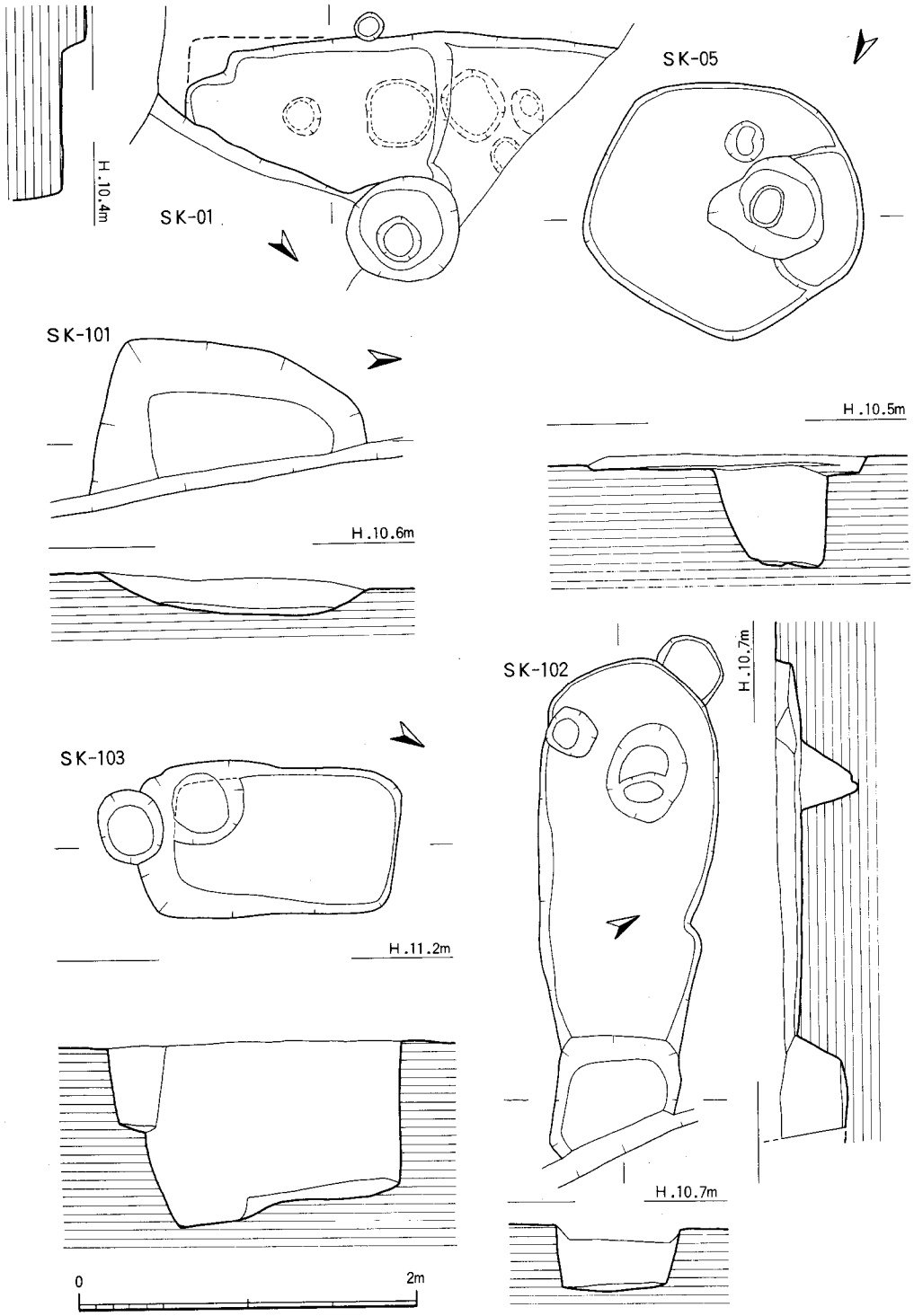


Fig.19　SK−01·05　101～103実測図（1/40）

SK−101（Fig.19、PL.8）

調査区の東南端で検出した土壙で、SK−102のすぐ東に位置している。東半部が調査区外に拡がるために明らかではないが、一辺が160cmほどの方形プランになろう。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は20cmを測る。底面は浅い凹レンズ状を呈し、断面形は逆台形をなす。覆土は暗褐色土が凹レンズ状に堆積し、遺物は土師器片が出土した。

SK−102（Fig.19、PL.9）

調査区東南端で検出した土壙で、SK−101のすぐ南に位置し、東側小口はピットと重複する。平面形は、長軸約260cm、短軸85〜105cmの楕円形プランを呈し、N−60°−Wに主軸方位をとる。壁高は約15cmの壁面はやや急峻に立ち上がるが、削平が著しい。底面は平坦で、断面形は箱型をなす。覆土は褐色〜暗褐色土が浅く堆積していた。

SK−103（Fig.19、PL.9）

調査区南端で検出した土壙で、SB−104のすぐ西に位置し、南側小口部はピットと重複している。平面プランは、長軸115cm、短軸70cmの長方形を呈し、主軸方位をN−29°−Wにとる。壁面は急峻に立ち上がり、壁高は70cmを測る。逆台形は箱型をなし、底面は中央部が浅く凹む。覆土は黒色〜褐色土が堆積していた。

4）．溝遺構

溝は、大小合わせて4条を検出した。その中でも溝幅4mを越すSD−105は、東側に接する第124・3次調査区の大溝に繋がるもので、これらの調査データを補完するものであろう。

SD−10（Fig.13、PL.5）

調査区中央で検出した真北よりやや西に振る小溝。全長2.8m、幅30cm前後、深さ4〜5cmを測り浅い。埋土は黒色土に黄褐色地山ロームブロックを混入する。遺物は、古墳時代のものと思われる土師器の細片が少量出土。

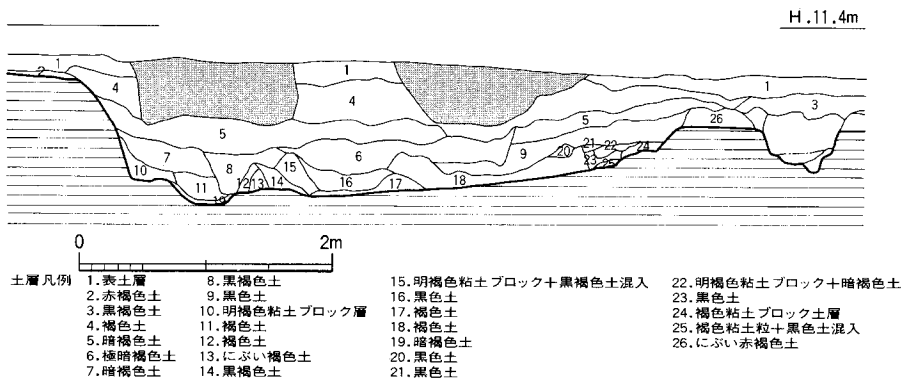


Fig.20　SD−105　土層断面図（1/60）

SD−12（Fig.13、PL.5）

調査区中央で検出した真北から約45°位振る小溝。南側は立ち上がり消滅する。SB−13に切られる。確認長さ3.5m以上、幅30〜40cm、深さ10cm前後を測る。埋土は黒土である。遺物は、古墳時代の土師器の細片がわずかにある。

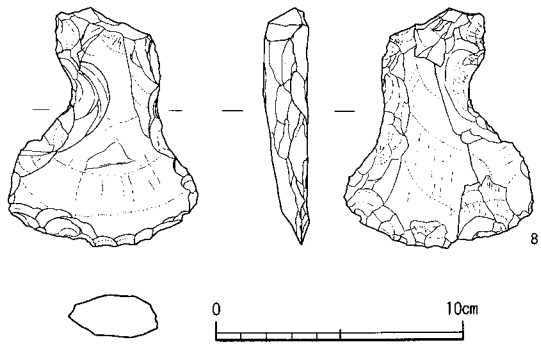


Fig.21　SD−09出土石器実測図（1/3）

SD−105（Fig.20、PL.5）

調査区の東半部を東西流する濠状の溝で、東壁側はSD−106を切っている。溝幅は4.5と広く、深さは90cmを測る。浅い凹レンズ状をなす底面は小さな段を造って東側に低くなり、断面形は逆台形をなす。台地はこの溝を境として北側が40cmほど段状に低くなる。覆土中からは古墳時代〜中世までの須恵器、土師器等が出土している。

出土遺物（Fig.21・22・23、PL.10）

8は上層より出土。撥形を呈す打製の石鍬。サヌカイトの剝片を利用したもので、2次調整で刃部を作り出す。全長9.5cm、刃部幅は7.5cm。9は弥生中期の蓋で、底は径4.7cm。胎土

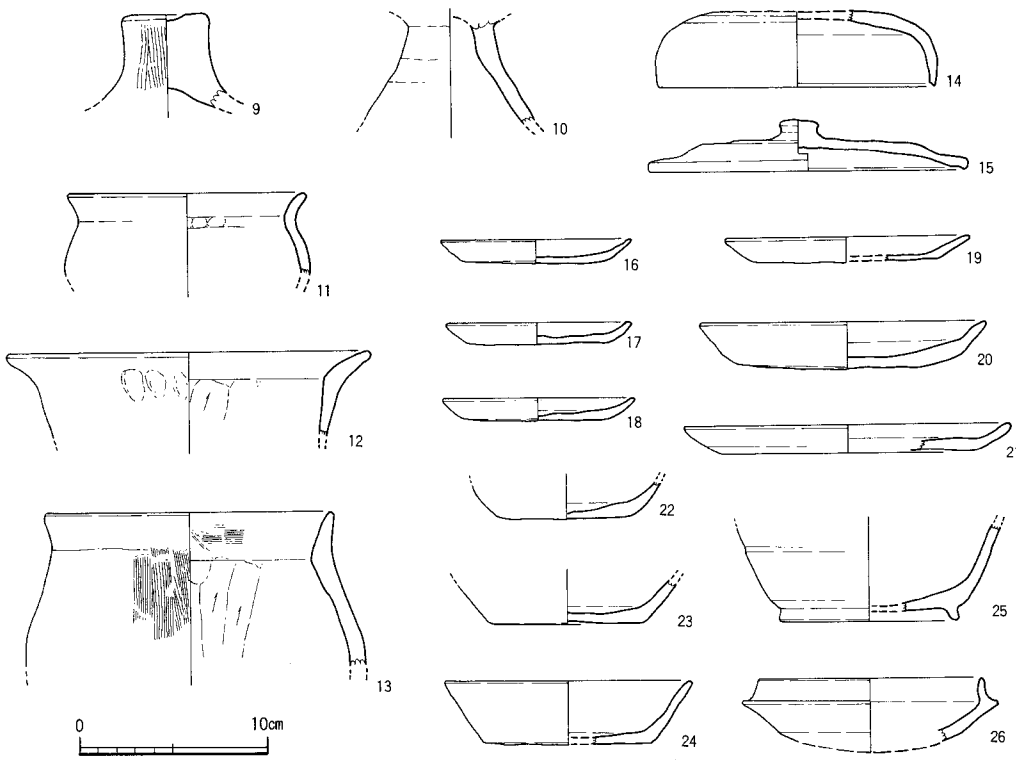


Fig.22　SD−105・106出土土器実測図（1/4）

は石英砂、雲母粒を多く含み、色調は暗橙色。10は土師器高坏で、脚部は短くラッパ状に開く。胎土は精緻で、黄橙色を呈する。11は口径12.8cmの小型壺。口縁部は短く「く」字状に外反し、胴部は扁球形をなす。胎土は石英砂を多く含む。色調は内面が褐灰色、外面は橙色を呈する。12・13は土師器甕。12は口径19.4cmを測り、短い口縁部は大きく外反する。胎土には砂粒を多く含む。色調は外面が赤橙色、内面は橙色。13は口径15.4cmを測る。口縁部は短く直口して立ち上がり、胴部は肩の張りが弱い。調整は口縁部内面と胴部外面がハケ目、胴部内面は粗いヘラケズリ。胎土は粗く砂粒を多く含む。色調は明黄褐色。14・15は須恵器の坏蓋。14は口径14.7cm、器高は4.0cm。直口する口縁部は端部が内傾し、天井部は平坦である。調整は天井部外面がヘラケズリ、内面がナデ、体部は内外ともヨコナデ。胎土は砂粒を多く含み、色調は灰色。15は口径17cm、器高2.8cmを測る。口縁部は端部を下方に小さく摘み出し、天井部には扁平な摘みが付く。調整は口縁部がヨコナデ、天井部はナデ。胎土は良質で、淡灰色を呈する。20・26は須恵器坏身。20は口径15.2cm、器高2.6cmを測り、口縁部は小さく反り気味に開く。調整は口縁部がヨコナデ、体部がナデで底部はヘラケズリ。胎土は良質で焼成は堅緻。色調は濃灰色。26は口径12cm。受け部は小さく上方に摘み上げ、口縁部は直口する。調整は口縁部～体部がヨコナデ、底部は内面がナデで外面はヘラケズリ。胎土は良質で、色調は灰白色。16～21は土師器皿。16～18は小皿で、口径は9.9～10.2cm、器高は1.2～1.3cm。19は口径13cm、器高1.4cm。21は口径17.4cm、底径13.2cm、器高1.5cm。口縁部はいずれも短く外反する。胎土は精緻で、色調は明黄褐色～黄橙色。22～25は土師器の坏身。23は底径8.2cm。24は口径13.2cm、底径９cm、器高3.4cm。体部は直線的に開く。胎土は精緻で、浅黄橙色を呈する。26は高台が付くもので、底径9.6cmを測る。直線的にのびる体部の中位に弱い段が付き、高台はやや外方に開く。調整は体部がヨコナデ、底部はナデで仕上げる。胎土は精良で、浅黄橙色を呈する。27は須恵器甕で、口径18.3cm、器高は32.9cm。「く」字状に外反する口縁部は端部が小さな段を作り、胴部は肩の張った扁球形をなす。胎土には小砂粒を多く含み、色調は濃灰色。

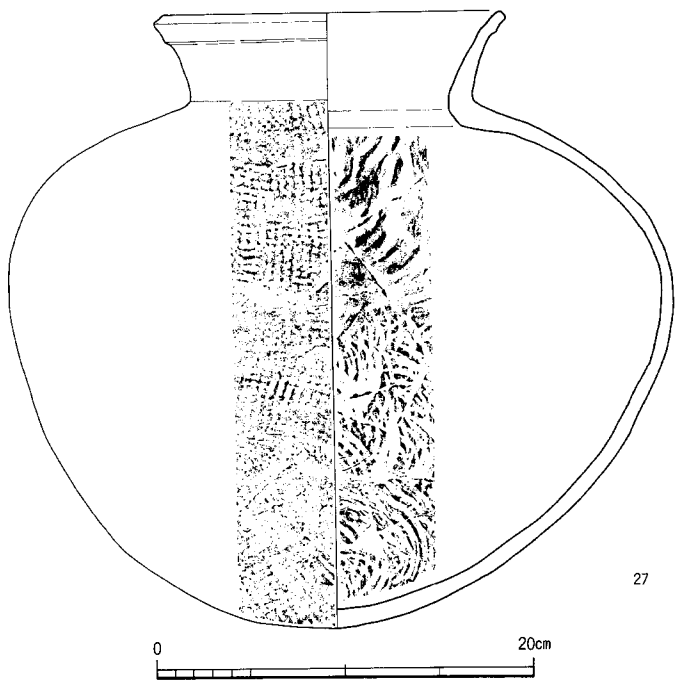


Fig.23　SD－105出土土器実測図(1/4)

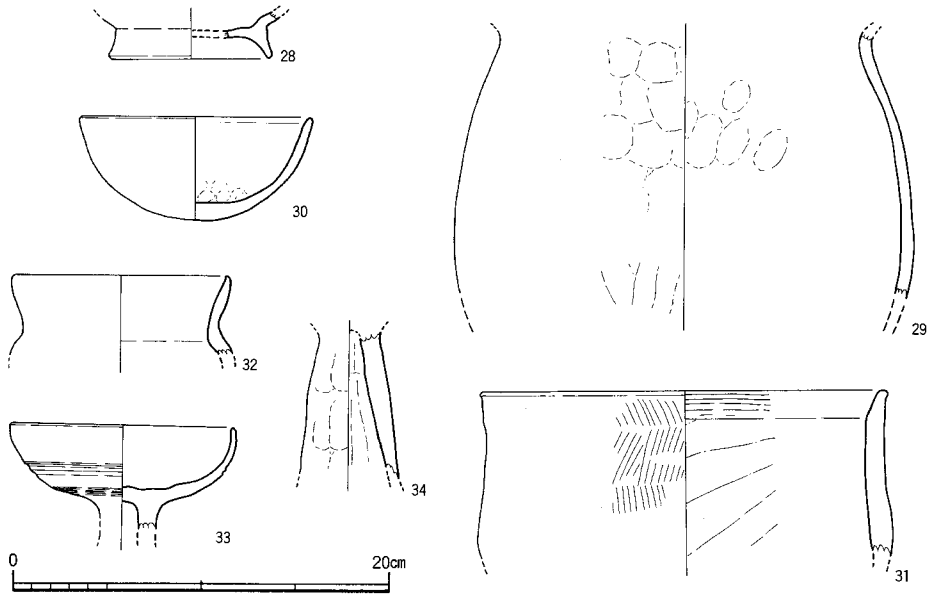


Fig.24　ピット・包含層出土土器実測図（1/4）

SD－106（Fig.20、PL.5）

本溝は、調査区中央を東流するSD－105の南肩部に沿い、その大半がSD－105に切られている。溝はSD－105の東端で終息し、現長で17ｍを測る。溝幅は溝底で約１ｍを測り、一部に小さなフラット面を作る。覆土は褐色～暗褐色土が凹レンズ状に堆積し、溝底の標高は10ｍ。

出土遺物（Fig.22、PL.10）

26は口径15.4㎝の土師器甕である。頸部は内傾して立ち上がり、口縁部は小さく外反する。調整は胴部外面が縦ハケ目、内面はヘラケズリ、口縁部内面には細かいハケ目。胎土は粗い。

5）．ピットと包含層出土の遺物

本調査区では、竪穴住居跡や掘立柱建物跡等の外にピットを検出した。これらのピットは建物跡としてまとまらなかったものである。また、遺溝面上には古墳時代～中世の遺物を含む黒褐色土の遺物包含層が堆積していたが、遺物量は比較的少ない。

出土遺物（Fig.24・25、PL.10）

28～31はピット出土の土師器。28はSP－26出土の高台付椀底部１/６片。復原高台径は8.6㎝。色調は淡橙色を呈し、胎土は精良。29はSP－57出土の長胴甕胴部１/４片。復原胴径は24.5㎝。胴外面は工具ナデで煤が付着する。内面ナデで指押さえ痕が残る。古墳時代前期のものか。30はSP－123出土の埦で、口径12.4㎝、器高は

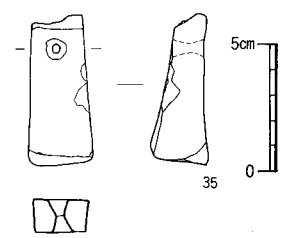


Fig.25　包含層出土石器実測図（1/3）

5.5cm。体部は半球形で、口縁部は小さく外反する。内外面ともに押圧ナデ。胎土は小砂粒を多く含む。31はSP－120出土の甕で、口径は21.8cm。胴部は直口気味に立ち上がり、口縁端部を外方に小さく摘み出す。口縁部と外面は粗いハケ目、内面はヘラケズリ。

32～35は包含層出土。32は土師器の壺で、復原口径11.6cmを測る。内外面指おさえ痕が残る。胎土に細砂粒を少量含む。33は須恵器の高坏坏部。口縁部と底部の境に2条の沈線が入り、境にはカキ目が入る。内外面横ナデ。色調は黒灰から暗灰を呈し、胎土に石英・長石を含む。34は高坏脚部。外面ナデ、内面しぼり痕が残る。色調は明橙色、胎土に細砂粒を含む。35は頁岩製の手持ち砥石片。四面を砥面として使用。上端中央には穿孔による直径0.8cmの円孔がある。

3．小　　結

有田遺跡群の第169次調査では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壙、溝遺構等を検出した。このうち竪穴住居跡は、規模としては大きくないが西壁側に竈を布設するもので、古墳時代後期頃に比定されるものであろう。また、掘立柱建物跡は1×1間から3×5間以上のものまである。時期的には遺物が少なく断じがたいが、SB－13等からして6世紀後半代が与えられ、竪穴住居跡と合い前後して集落を構成したものと考えられる。このことは第164次調査区や第124次調査区の成果とも符合することである。一方、調査区の中央部で検出した溝は、幅4.5mを測る大型のもので濠状をなす。この溝は東接する第124・3次調査区検出の大溝に繋がるもので、有田台地中央の鞍部を横断するように東西に流れている。この溝は早良平野の条里方向にほぼ直交し、約20mの距離をおいて平行する溝が北側の第164次調査区でも確認されている。時期的には平安時代初め頃に比定でき、周辺調査区の調査データを補完するものである。

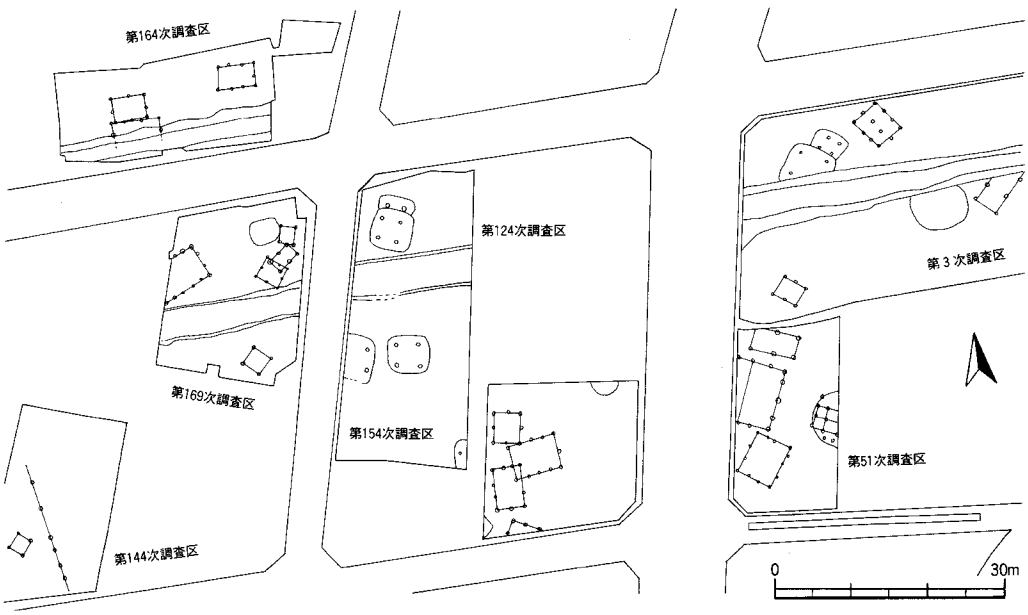
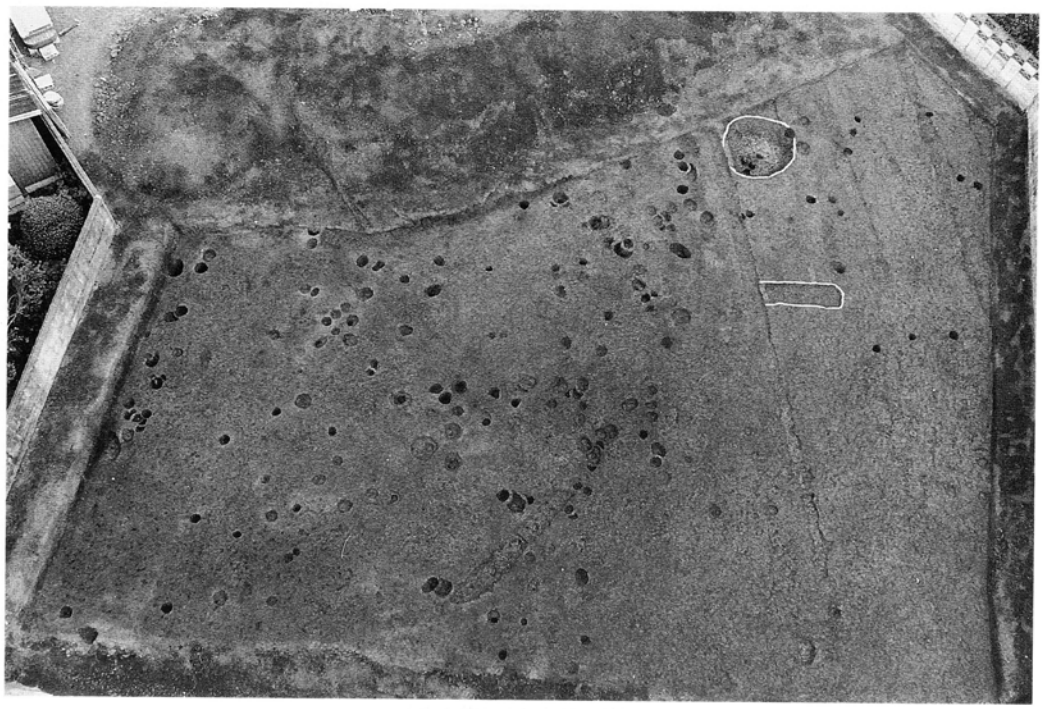


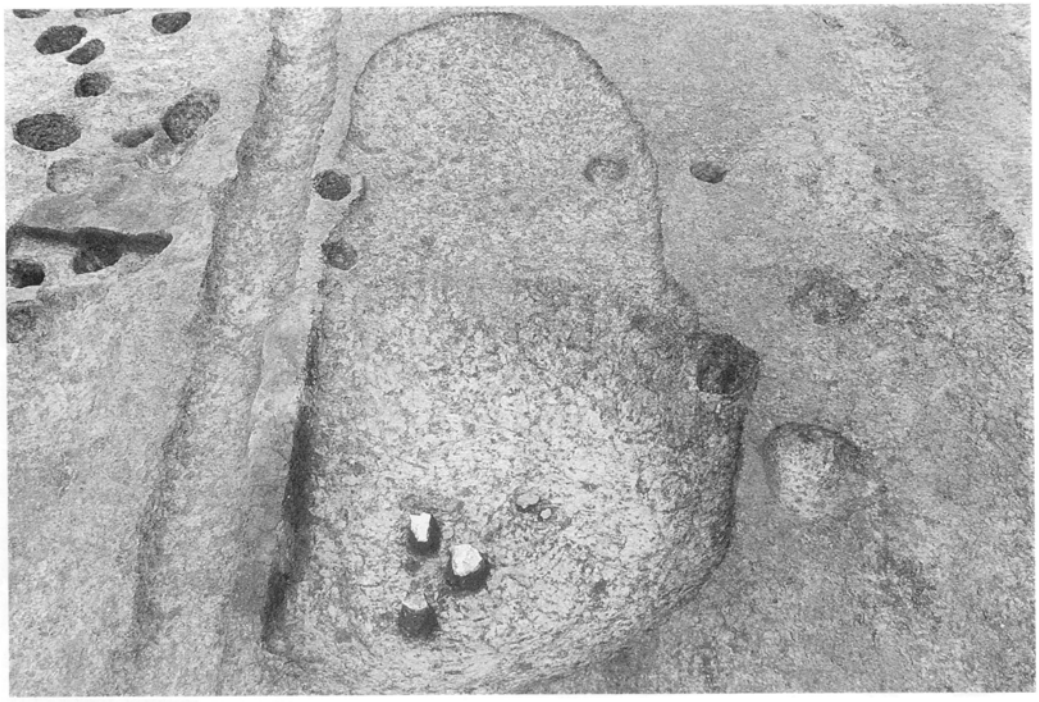
Fig.26　第169次調査区周辺遺構配置図（1/1,000）



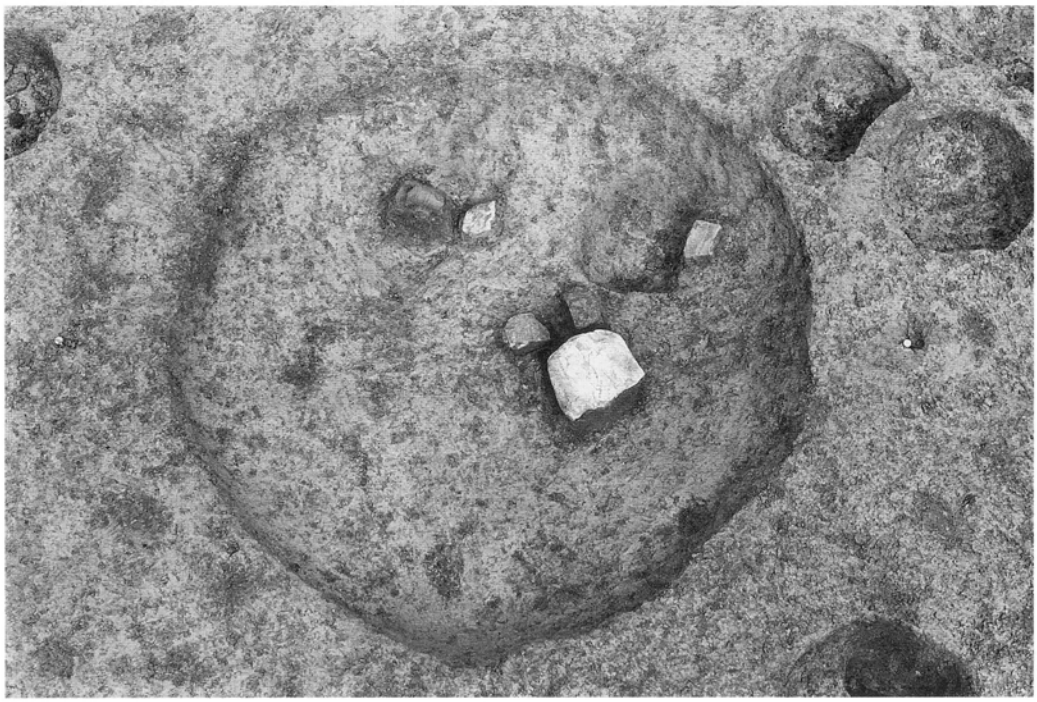
(1)　調査区南半部全景（南より）

(2)　調査区北東部全景（北より）

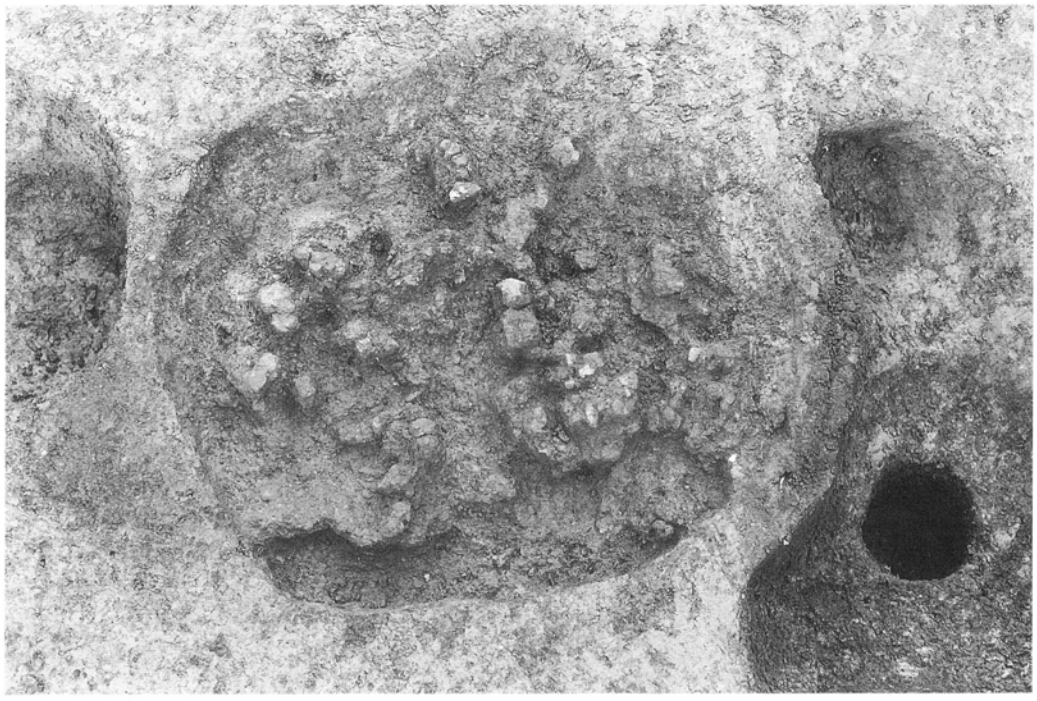
(1) SK－01（南より）



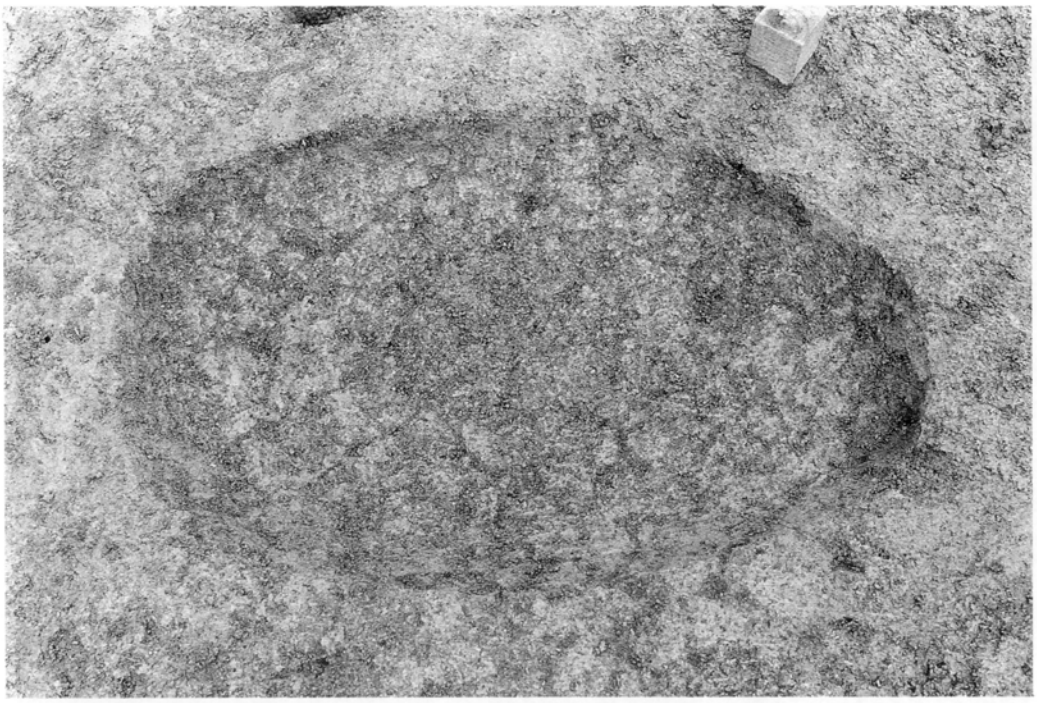
(2) SK－02（南より）



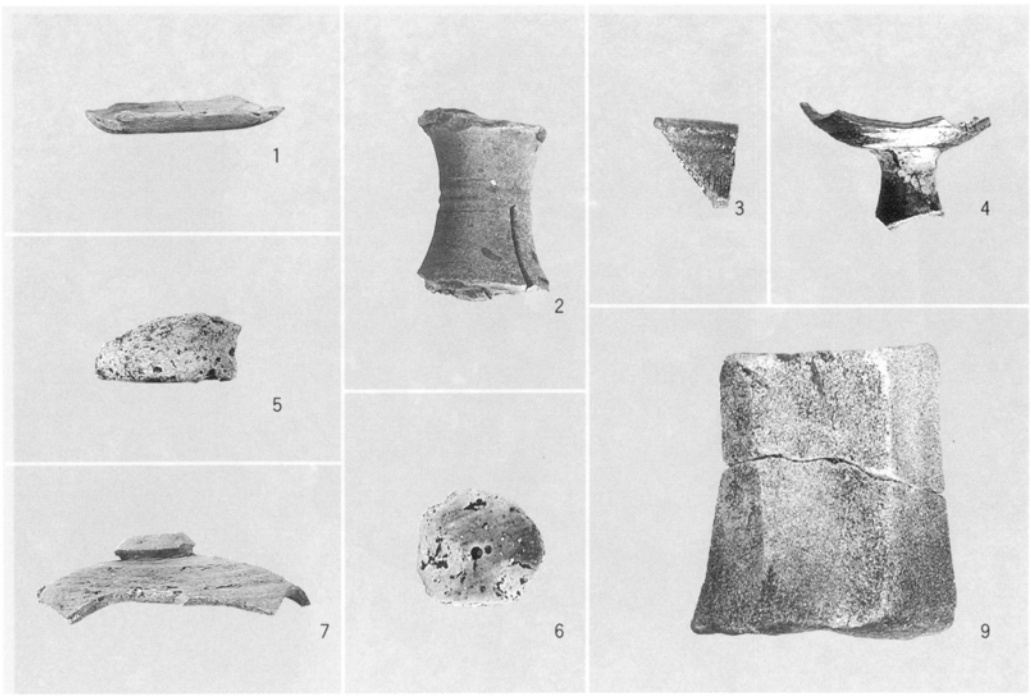
(1) SK－03（南より）



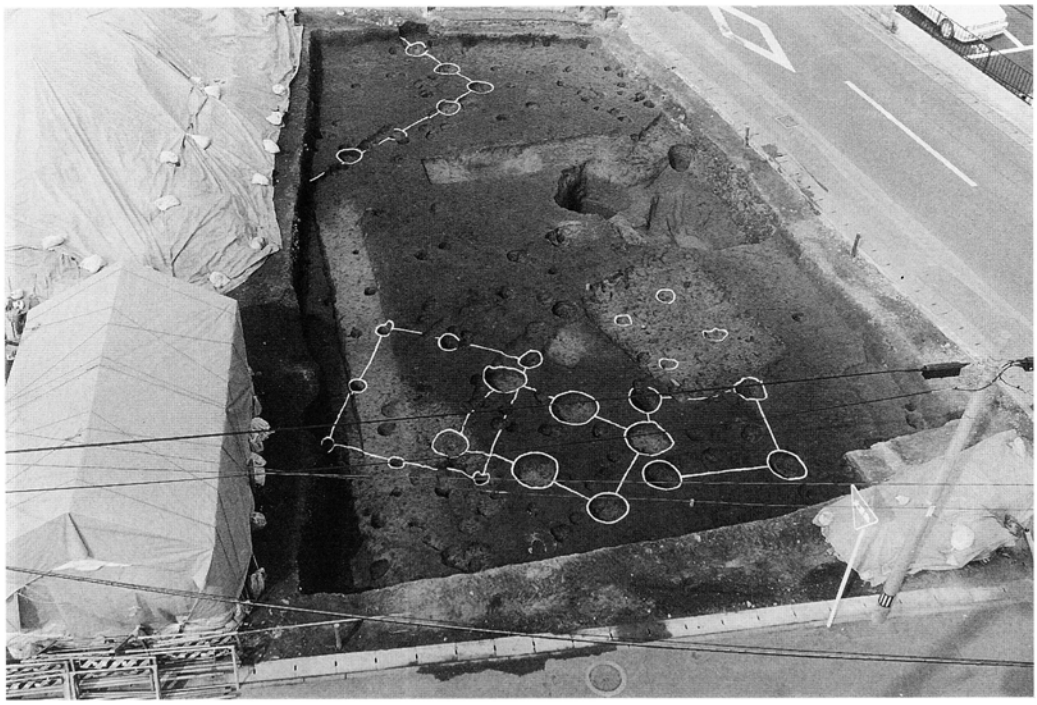
(2) SK－04（北より）



(1) SK－05（南より）

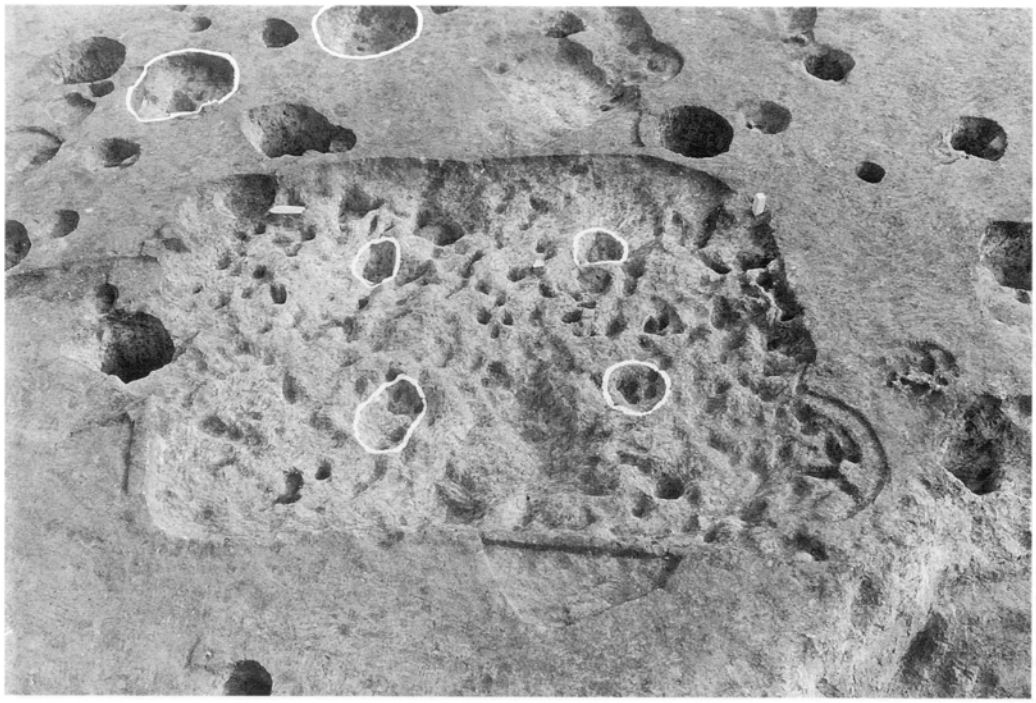


(2) 有田第160次調査出土土器・土製品・石器

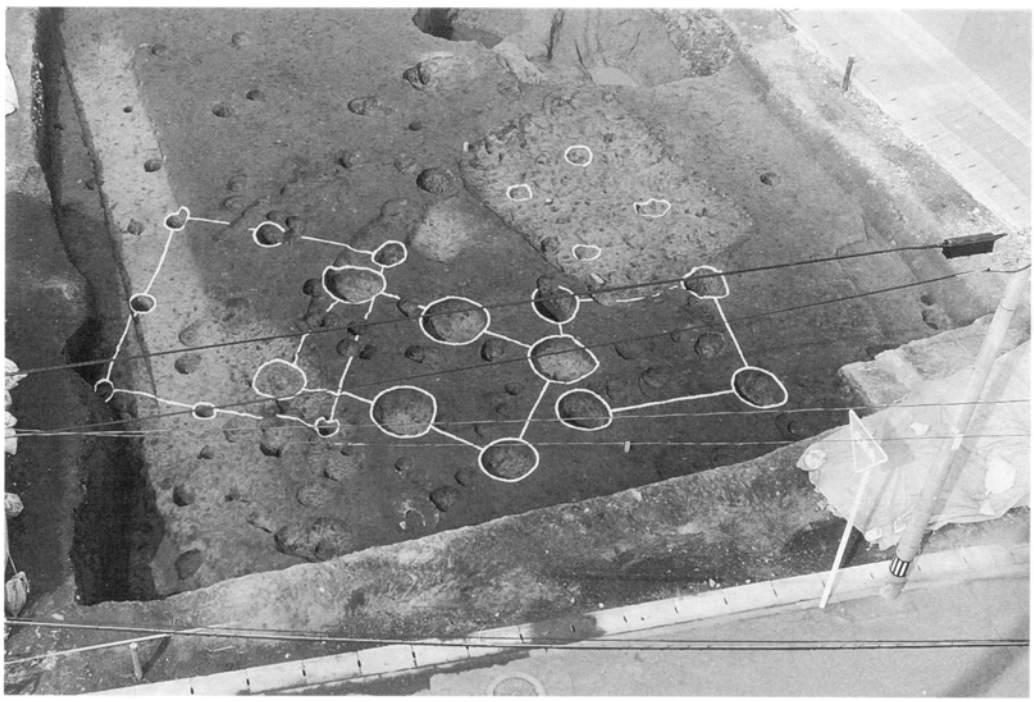


(1)　Ⅰ区全景（東より）

(2)　Ⅱ区全景（東より）

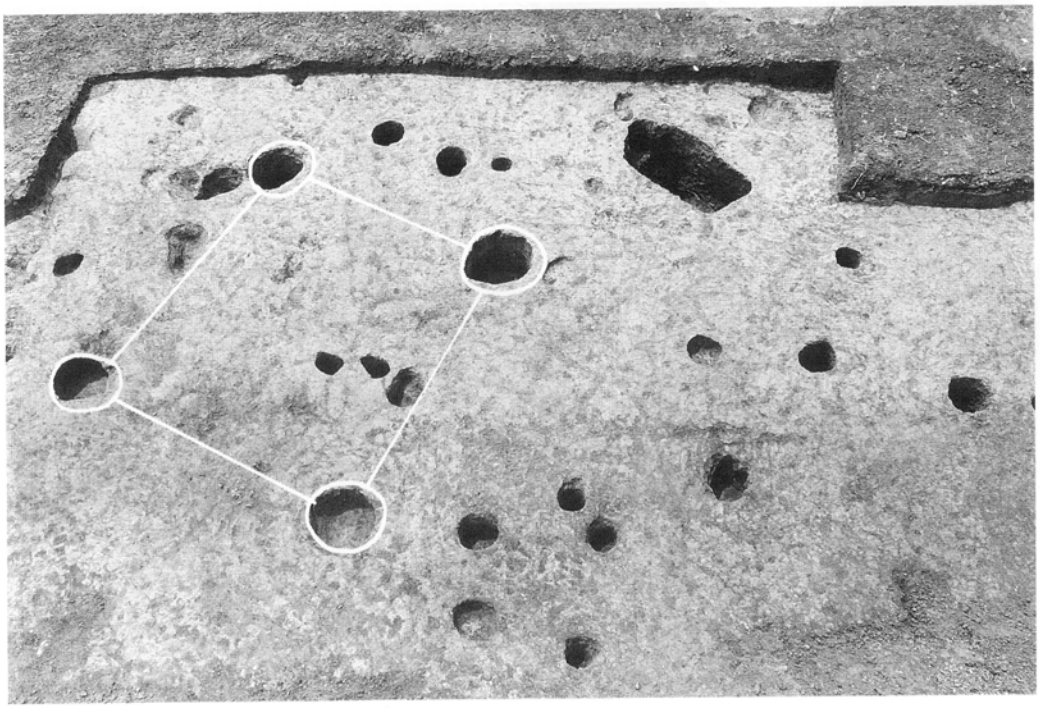


(1) SC－04（北より）



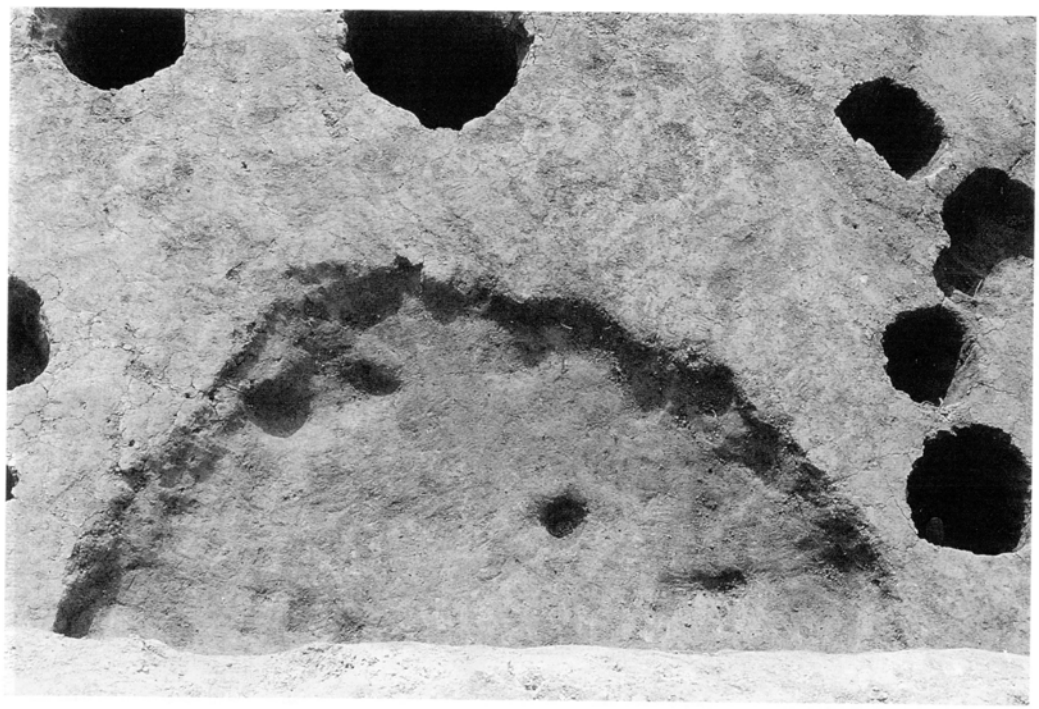
(2) SC－04,SB－14～16（東より）

(1) SB－13（東より）



(2) SK－103,SB－104（北より）

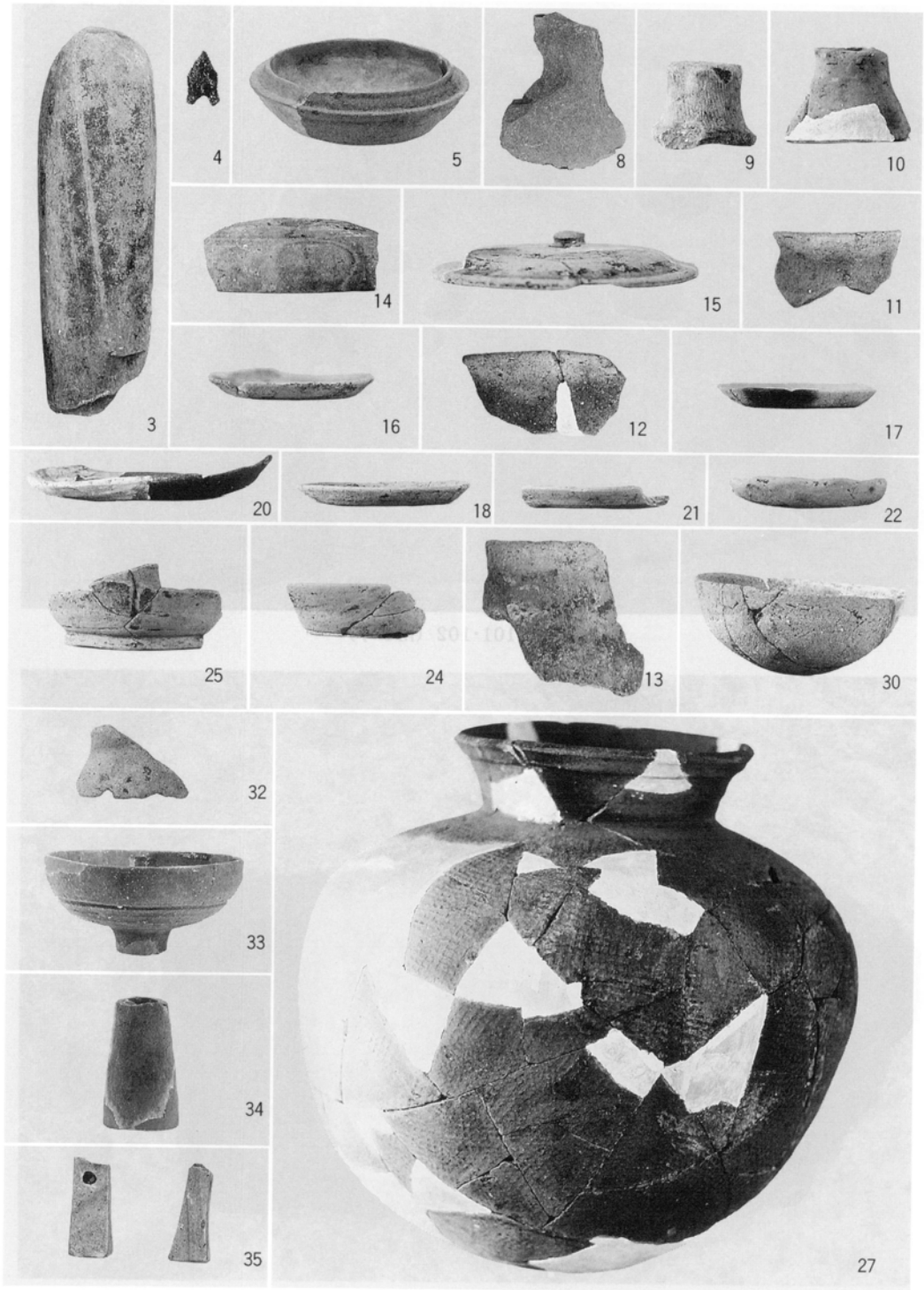
(1) SK－01（南東より）



(2) SK－101（東より）

(1) SK－101･102（南より）

(2) SK－103（東より）



有田第169次調査出土土器・石器

有田・小田部 第17集

— 第160・169次調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第339集

—1993年3月31日発行—

発　行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1－8－1

印　刷　久野印刷株式会社